

地名も通して見ろ

天竜川と人々の暮らし

松崎岩美

目次

案内図

はじめに

第一部 心の支え天竜川

一 子どもと天竜川

二 天竜川という川

(一) あらたまがわ(麿玉川)

(二) ひろせがわ(広瀬河)

(三) あめのなかがわ・あまのなかがわ・

てんちゅうがわ(天中川)

(四) てんりゅうがわ(天竜河・天竜川・

天流川)

第二部 地名とは何なのか

一 地名の性格

(一) 地名の成立

(二) 地名の拡大

(三) 地名の移動

(四) 地名と苗字との関係

(五) 地名の役割・特性

(六) 地名保存の必要性

二 個々の地名の由来を考える

(一) わりち(割地)

(二) どば(渡場・土場)

(三) くるみぶち(胡桃瀨)

(四) みのお(箕輪)

(五) おびなしがわ(帯無川)

(六) しゃくだて(柵立)

(七) いがしま(伊賀島)

(八) かすみてい(霞堤)

(九) どてはっちょう(土手八丁)・おお

どて(大土手)

(一〇) いりふね(入舟)

(一一) たぎり(田切)

(一二) みぶがわ(三峰川)・みぶさわ

(壬生沢)

(一三) こしぶがわ(小渋川)

(一四) わだ(和田)・こわだ(小和田)

(一五) かじがしま(鍛冶ヶ島)

(一六) しとく(四徳)

(一七) かきがいと(柿外土)と「かい

と」地名

(一八) ださら(出砂原)

(一九) いくま(伊久間)

おわりに

はじめに

私たちの暮らしは、その地の自然環境の制約を受け、その範囲内だけで行われているに過ぎない。私たちの生活文化はその地の自然環境からの恵みにより維持され発展する。そしてふるさと伊那の生活文化の「生みの親」の一つと云ってよいものに天竜川（「天龍川」もあるが、以下「天竜川」とする）の流れがある。

天竜川は伊那を南北に貫流し、東西にはこれと平行して赤石山脈と木曾山脈が南北に連なり相対している。伊那の人々の暮らしは、古来より天竜川とこれらの山々を心の支えとして、日々の暮らしの中に取り込んできたように思われる。

たとえば上伊那地方の小・中学校の校歌を見ると、総数五一校のうち、その歌詞に「天竜川」や「天竜の流れ」あるいは天竜川水系の「三峰川」等の支流が歌い込まれているものは四六校に及ぶほか、「川の流れ」としているものも一校ある。川の名がまったく入っていない学校は四校に留まっている。こうみると、学校教育の場においては、山と川をいかに重く見ているかがわかる。つまり山河（国

土・ふるさと）が人間形成のうえで重要な要素と考えられてきた証左といえよう。

天竜川に流入する支流の多くは、山を出たところから扇状地を造りながら流れ下り、天竜川沿いには氾濫原に臨む段丘崖が形成されている。飯田以南では天竜峡のような峡谷になっている処もある。このような地形の違いにより、それぞれに応じた地域文化が育まれてきた。たとえば、伊那谷の上流域では郷土食として五平餅がある。これは、その地形や水利の発展等を背景とした県内屈指の米どころであることに因ると思われる。また中流域では干し柿が名産であるが、これは天竜川の川霧の発生が一つの理由だといわれている。

この扇状地や氾濫原、段丘崖、川の屈曲点、深い峡谷の中にまで、その地の自然環境に適応して営まれてきた人々の暮らしの跡が数多く残されている。その一つに「地名」があり、なかには千年をはるかに超える寿命の長い地名もある。

本書は、天竜川と関わりの深い地名を選び、それがどのような経緯を経て成立したかを考察するとともに、それらの地名を通して、天竜川とその流域に暮らしてきた人々の暮らしの様子やその地の民俗・歴史等もあわせて考えようと試みたものである。

第一部 心の支え天竜川

一 子どもと天竜川

私は大正一二年（一九二三）に伊那市北部地区の天竜川左岸の河畔に生まれた。その後一〇年の中断期間があったが、現在もこの地に暮らしている。

私が物心ついた昭和初期の小学生のころを振り返ってみると、子どもと天竜川とは現在よりも、もっと結びつきが強かった。当時の子どもたちの生活領域は、毎日通う地区内の学校（分教場）と集落周辺の限られた地域であった。集落の東側には天竜川に並行する段丘崖があり、その斜面は里山の山林になっていた。さらに山林につづく東側の段丘上は平坦な畑作地帯で「原」と呼んでいた。一方、集落の西約一〇メートルには天竜川が流れ、そこまで一面の水田地帯であった。子どもたちは学校へ行っている時間以外は基本的には天竜川を含めたこの地域内で遊んだり、親から言いつかつた手伝いの仕事をして過ごした。

私たちは、人と交わることでその人に対する敬愛の気持

ちが生まれる。同様に、川や自然に対しても、それらに接し、その中に身を置くことによって愛着の情も湧くというものであろう。そこで、子どもの遊びを通して、地域が天竜川とどのように関わってきたかを、伊那市在住の唐木佐一氏と松崎義夫氏の回顧談を中心に見てみたい。

当時（大正から昭和中期）、水田地帯には天竜川の本流から取り入れた水を流す灌漑水路があった。小さな子どもや女の子は、ここで水浴び（水遊び）をしたり、魚とり（ウロツカミ・せせり・釣りなど）をして遊んだ。その頃は養蚕が盛んで、夏の時期、大人たちは忙しく、とても子どもをみる余裕はなく、遊びはもっぱら子ども同士でするのが普通であった。

小学校高学年になると、天竜川の本流のほうへ行くこともよくあった。当時の天竜川には灌漑用水の取り入れのための牛枠の列が上流に向かって斜めに設置されていた。水は現在より澄んでいて、牛枠を足場にして水の中を覗き込むと、七、八センチもする鯉や緋鯉の群れがすぐ目の前に見えた。子どもはこれを見ると興奮状態になり、一目散にうちへ飛び帰り、ザルや網を持ってくる。しかし、いくから見えていても水中の魚を捕らえることは、子どもにできないことではなかった。けれども、大きな鯉の群れは彼らの

脳裏に焼きついて、天竜川とともに終生消えることはないように思われる。

子どもと天竜川について、挙げるべきことがもうひとつある。中高年の人に昔の天竜川について何が最も印象に残っているかと問うと、「水浴び」と答える人が多い。当時、川で泳ぐことを「みずあび」といったが、小さな子どもたちは泳ぐというよりは水遊びという程度であったにしろ、暑い盛りの最大の楽しみであった。まだ学校には水泳プールがなかった頃なので、先生に引率されて近くの天竜川に行って泳いだ。高学年の男子ともなると奔流の中を抜き手で泳ぐ者もいた。低学年や女子は浅いところで浴びるだけであったが、子どもたちは大喜びで、これも生涯忘れられないらしく、懐旧の念をこめて話す人が多い。

高学年になると自然にリーダーが生まれ、その下に七、八人の仲間ができ、彼らは誘い合って天竜川へ行った。夏は養蚕の最盛期で、子どもといえども少し大きくなると手伝わされたので、親の目を盗んで水浴びに行くのは容易ではなかった。それでも、彼らは子どもなりの策を弄し、「早く帰ってくるから」「あしたは行かないから」などといい、示し合わせて出かけたという。天竜川へ行くと、対岸



絵 天竜川で泳ぐ子供たち (唐木佐一氏・画)

の村の子どもも来ていて、時には両者でけんかになった。

「（対岸の村の名）の小僧たち喧嘩けんかに來い。來る道きんたま落とすなよ、俺が拾えばやるけれど、カラスが拾えば食うちまっ」と大声で叫ぶ。向こうも負けてはいない。

「（村の名）の学校へば学校、建てたときからつっけんぼう」のような応酬がつづく。この後、川原の石の投げあいとなる。旗色が悪くなると、衣類を持って逃げだす。勝った方は一応追いかけるが深追いはしない。

こうしたことは当時「喧嘩」といつていたが、娯樂の少ない子どもたちが創り出した遊びと考えるとよいであろう。当地域の古老の話によると、このようなことはどこでもあったという。

昭和三〇年代に入ると、戦争による荒廃から徐々に立ち直り、生産活動が急速に回復していった。これにあわせて、天竜川の水質汚濁という予期しない事態が発生した。原因は、生産工場からの工業廃水だけではなく、一般家庭からの雑排水にもよるものであった。

そして昭和三〇年代後半になると、学校に水泳プールが建設されるようになり、これによって天竜川での水浴びは、多くの思い出を残しながら、これ以後は見られなくな

った。

二 天竜川という川

天竜川は諏訪湖を源とし、伊那地方を北から南に貫流して遠州灘に注ぐ日本有数の大河である。その長さは二一三キロメートル、流域面積は五〇九〇平方キロメートルで、流域内には大多数多くの支流があり、これらをまとめて天竜川水系と呼ぶ。

「天竜川」の名は、たとえば天に住む竜神を「天竜」と呼んだことから、天竜川を「神の通り路」として地域の人々に認識されていたとする見方もある。まず天竜川の呼び名が出てくる史資料を、古い順に見ていくことにする。

(一) あらたまがわ（麿玉川）

天竜川の古い呼び名とみられるものに「麿玉川」がある。これは当伊那地方での呼び名ではない。古代遠江国とほろのくに（現静岡県）北西部の浜松・浜北・天竜各市と引佐町いなさの各境界を接する地域を麿玉地方といい、ここを流れる川が麿玉川である。したがってこの名は天竜川下流部の名としてよいであろう。

古代の史料にこの川の災害のことが書かれている。地域は異なるが、当伊那地域の天竜川について参考になる点もあると思われるので、ひと通り見ることにする。

平安時代の一〇世紀半ば頃に書かれたとされる日本初の分類体漢和対照辞典（百科事典）である『和名抄』の中

鹿玉地方位置図（静岡県）



写真 天竜川河口部（「天竜川」より）

に遠江国の郷名として「阿良多末（麻・万）」（あらたま）がある。現静岡県引佐町には「龐玉」という地名があるほか、浜北市には龐玉中学校もある。

この地域の天竜川は佐久間町、竜山村を経て同県の二俣付近で山岳地帯を脱け出して平野部に入る。さらに川は天竜市・浜北市・浜松市を通過して太平洋に注いでいる。

狭い山地から平野部に入った天竜川は自由に流れ、その流路は古来より幾度遷を重ねていたため、今も当時の流路跡とおぼしい数本の流れや地形が残っている。それらの中で、現在の遠州鉄道に沿うように流れる馬込川（現天竜川の西側を流れ、太平洋流入の際は浜松市街の東側を流れる）は、往古の天竜川流路のひとつとされている。このほかにも浜北市に江戸時代以来「小天竜」と呼ぶ流れがあり、また同市「小林」付近では天竜川のものかどうかは特定できないが、堤防跡が発掘されている（浜北市教育委員会）。

「龐玉川」関係資料

『続日本紀』 霊龜元年（七一五）五月二五日

「遠江国地震、山崩れ龐玉河を塞ぐ、水、これがため流れず、数十日を経て三郡の民家百七十四余

区を潰没す。」

『続日本紀』 天平宝字五年（七六一）七月

「遠江国荒玉河の堤、決（さく）ること、三百余丈、

単功三十万三千七百余人を役し、糧を充て修築せしむ。」（「丈」は「尺」の一〇倍で約三メートル）

資料 は地震によって龐玉河がふさがれ、民家一七〇余区が潰没したというものであるが、この川は少なくとも三つの郡に亘っていた大河であったことである。この地域でこのような川は天竜川以外には考えられず、龐玉川は天竜川の下流部を指す呼び名としてもよいであろう。

資料 の史料では、当時龐玉川にはすでに堤防が築かれていたわけで、治水対策が早くから行われていた事になる。史料には堤防三〇〇余丈（約一〇〇〇メートル）決壊とあり、当時大規模な堤防ができていたことが窺われ、またその修復に膨大な人足と食料などが投入されたこともわかる。

さらに、『万葉集』には龐玉地方の人の歌が三首も入っている（四三三二六、一五三〇、三三五三）。これは前記『続日本紀』の記事とともに一地方としては珍しく多い。当時この地域はかなり開発が進み、繁栄していたことが考

えられる。この状況は後世までも続くが、そのためか天竜川関係の古い時期の資料はこの下流域のものだけで、伊那地方に関する記述は全く発見されていない。

「あらたま」の「あら」はあらあらしい水流、「たま」は土砂が溜まることを言うともみてよい。

(二) ひろせがわ(広瀬河)

『文徳実録』に、仁寿三年(八五三)一〇月「遠江国広瀬河」とあり、ここには舟二艘あつたが急流で運航が捗らず、待つ人が岸に滞るので、さらに二艘を加える、とある。この資料では「遠江国」とあるだけで川の位置は記されていない。しかし、馬込川沿いに「広瀬」という地名があり、「広瀬川」は天竜川の古名の一つだと考えられている。

(三) あめのなかがわ・あまのなかがわ・てんちゅうがわ(天中川)

資料 『更級日記』

これは菅原孝標の娘の著作といわれ、康平年間(一〇五八〜一〇六五)の成立とみられている。この本の中の「七」の「天中川のほとりに病を養い、三河の歌枕をすべ

に次のようにある。

「遠江にかかる。(中略) いみじく苦しければ天ちう」という川のほとりに仮屋造り設けたり。(下略)「

「天ちう」は、『更級日記』が記す通過地点の順序から天竜川を指すことは明らかである。一世紀中頃、天竜川は「天ちう」「てんちゅうがわ」であろう」と呼ばれ、これは「あめのなかがわ」(天中川)の音読みとみられる。「天ちう」が使われていたことになる。

資料 『海道記』

この本の作者については諸説あり特定できないが、貞応二年(一一三三)四月二日ところに次のようにある。

「上略)ところどころ、みちとなれば見るにしたがいてめずらしく、天中川を渡れば大河にて、水面三町ばかりあれば、舟にて渡る。(下略)「

「天中川」は、読み仮名がないのでどのように読んだかはわからないが、前記の『更級日記』の例から「てんちゅうがわ」と読んだ可能性が高い。

(四) てんりゅうがわ(天竜河・天竜川・天流川)
資料 『太平記』巻第一四 建武二年(一一三三〜五)

一〇月一四日

「十四日の暮程に、(新田義貞) 天竜河の東の宿に着き給いけり(下略)」

この場合「天竜河」の文字は「てんりゅうがわ」と読んでよいので、鎌倉時代末には今と同じ「天竜川」と呼んでいたことになる。この時期以降、中世の信濃国内関係の資料には次のような「天竜川」、「天流川」が見られる。これらは以後盛んに使われ、現在に及んでいる。

○延文二年(一二五七)『諏訪大明神画詞』^{えいごま}に「諏訪海の流れの末は天竜川」とある。

○延徳元年(一四八九)『文永寺の橋供養の風踊文』に「一条の大河南北に貫く。これを号して天流」とある。

資料 『玉勝間』^{たまかつま} 巻の七

本書は本居宣長の著作で、寛政五年(一七九三)から享和元年(一八〇一)の間に書かれたと言われる。

「(上略) 遠江の国なる天竜川をいにしえは、「天(あめ)のなががわ」といけるよし、同じ更科の日記には天ちうという川つらに、云々とあり(下略)」と書かれている。

以上の資料に見える天竜川の呼び名は、 麿玉河 広

瀬川 天中川 天ちう川 天竜河 天竜川 天

流川がある。このうち「天中川」の漢字は、「あまのなががわ」あるいは「あめのなががわ」と読んだとみられる(本居宣長)。基本的には漢語読みでない「あめのなががわ」が古くからのもののように思われる。「あめ」は天とか高いところをいい、「なががわ」はその高地の中を流れる川をいうとみられる。

以上から、「天竜川」という地名の変遷は、はじめ小地域ごとの呼び名があり、その後人々の生活圏の広がりに応じ「あめのなががわ」のようになったと考えられる。

高地から流れ出る川を意味する「あめのなががわ」は、中世ごろになるとその発音に対し「天中川」の文字を当てたとみられる。

その後、この「天中川」を音読みにすることが始まり「てんちゅうがわ」となり、さらに「てんりゅうがわ」に訛つたものであろう。これらの前後関係は明確には言えないが、最終的には中世以降「天竜川」「天流川」の文字が一般的に広く使われるようになったとみてよからう。

第二部 地名とは何なのか

天竜川とその流域には、川とのかかわりの中から発生した地名が数多く伝えられている。これらの地名を検証することによって、人々がどのように天竜川と共に生きてきたかを具体的にみる事ができる。現在伝えられている地名には、人々が天竜川の洪水・氾濫の猛威に苦しめられ、これに対しどのように立ち向かったかを物語るものが大変多い。これを見る限りでは、天竜川は人を苦しめただけという事になりかねないが、普段の天竜川は私たちに限りない恵みを与えてくれる母なる川であることは言うまでもない。そしてこの恵みを基盤にして、伊那の地域文化が長い時間をかけて徐々に形成されてきたのである。

一 地名の性格

曰く私たちはきわめて多くの地名に接しており、それによって多くの事柄を理解し、日常の付き合いや、暮らしに必要なことを処理している。まさに地名なくしては円滑

な社会生活を送ることはできないと言っても過言ではなからう。しかし身近で重要な地名ではあるが、私たちは水や空気と同じように、その価値に思いを巡らすことも少なく、曰く見る見過ごしていることが多い。しかし改めて地名の発生から定着にいたる過程、さらにその役割・機能を考えるか否かなしに地名に対する認識を新たにせずにはいられない。

地名の由来は、文字から導き出すことは難しい。これは、地名の本体は話し言葉（発音）だという理由からである。これが地名を考えるうえで最も重要なことである。この点について、膨大な『大日本地名辞書』を完成させた地名研究の先覚者である吉田東伍は、その「汎論」の中で「地名呼の変転は、ウチノコト専音声の条理に因る」と地名研究においての音声の位置づけをしたほか、柳田國男等も発音が基本であることを述べている。

(一) 地名の成立

事例 1 してぐり（為栗）

下伊那郡天龍村の天竜川沿いに「為栗」がある。ここでは飯田線が天竜川のすぐ東側に沿って南北に通じ、川に臨んで「為栗」駅が設けられている。周辺に人家は一軒だけ

だというが、駅から西に向かいやっと人が通行できるつり橋が天竜川に架かっている。現在、この辺りの天竜川の様子は、「為栗」下流に平岡ダムができた（昭和二十六年竣工）



写真 「為栗」駅付近（「空から見た天竜川」より）

ためにダム湖の様相を見せていて、往時のような流れは見られない。しかし注意して観察すれば、かつては駅のすぐ下まで天竜川の流れがきていて、川によって洗われていたことがわかる。

「為栗」という地名の由来はどのように考えたらよいであろうか。まず「して」「は」「し」と「が」転じたものと考えられ、動詞「して」(浸)とも関連し、水に浸った所を言う地名となる。「し」と「は」水のことであるが、当地方で赤飯を蒸すとき水を加えることを「しとをうつ」というのはこの例である。尿のことも「し」と「い」とい、この用例は古来大変多い。たとえば芭蕉の『奥の細道』の中の「尿前の関」での句「蚤虱(のみしらみ)馬が尿(しと)する枕もと」はこの例である。当地方では幼児に排尿を促すとき「シートト」「シートト」といったが、これも同類である。

これらの例から、「し」と「は」水や尿を言っているが、地名では水や川を言うことが多い。当地方には「四徳」(後述)のような「し」と「が」つく地名もある。

次に「して」の「り」「り」についてだが、これはどこでも見られるきわめて多い地名である。たとえば「栗田」「栗幅」もこれと同類である。これらの「くり」「は」水流に

よって決られ浸食されたところを言う地名である。この「くり」についての卑近な例は裁縫用語の襟ぐり、袖ぐりの「くり」と同じで、これらは襟や袖をつけるためにその部分の布地を割^くり取ることを言う。結局、天龍村の「為栗」は天竜川の水流によって決り取られたところを言う地名であり、文字からは想像もつかない。なぜこのようになったかであるが、文字も使われない遠い昔から「してぐり」と呼ばれ、地域住民によって口から口へ伝えられてきた。ところが文字が使われるようになると、それまで「してぐり」と呼ぶこの地名の意味も考えず（おそらくそれが既にわからなくなっていたと思われるが）、その音に対し「為栗」の文字を当て字したのである。かつては「為」という文字は「勉強をして（為て）から遊ぶ」のよう^にに使った。下伊那地方にはこのような漢字や漢語を使った地名がよく見られる（「秦阜」）やすおか（「陽原」）ひさわ（等）。

事例 2 ふるてら（古寺）

伊那市東春近下殿島に「古寺」があり、地域での発音は「ふるてら」で、「これは注目に値する。」古寺は県道の竜東線（伊那・辰野停車場線）を南に、三峰川を渡り、さら

に行ったところである。この集落の東側はすぐ段丘崖で、西側には天竜川が流れ、南側には富県方面からの大沢川も流れている。この川は天井川の様相を呈していて、洪水氾濫のときは川より北に位置しているのに「古寺」へ流入することがあったという。「古寺」はそれほど低地だということである。さらに東側の段丘崖の裾から湧水が多いということであり、低地に加え湧水となれば、いわずと知れた沼地・湿地である。

集落で聞き取りをすると、人々は異口同音に「古寺」は沼田であったという。そしてかつて土地改良工事のとき、地中から「そだ暗渠^{あんじょう}」が三本発掘されたこと、さらにここは軟弱地盤のために工場建物を建てる^{とき}栗の角材を多数地中に打ち込んだという。こうしたことは、往時ここは沼田だったという人々の証言を裏書するものである。

この「古寺」の「ふる」は新旧の「古」ではなく、沼地・湿地のことである。語源は、沼地等は土地が柔らかで「ふるえる」（震）からと考えられる。各地に「古」地名、「古町」「古田」等が見られるが、いずれも湿地状の地である点で共通している。

次に「てら」（寺）であるが、これも寺院ではなく、地形用語への当て字で、平地を言う語の「たいら」が「たい

ら」「てら」「てら」と変化し、それに対し一般によく使う「寺」を当てたものと思われる。用例としては「山寺」（伊那市）「寺所」（飯田市）等で、これらはいずれも平地である。それにしても「てら」が「やまてら」（山寺）のように「でら」に変化せず地名発生当時の「てら」が伝えられていることは珍しく、貴重な例である。

事例 3 こまつぶれ（駒潰）

宮田村新田には「駒潰」（こまつぶれ）がある。ここには富士信仰の富士山をかたどった富士塚を思わせる塚があり、塚の上には山岳信仰の数基の碑が建てられている。塚への上がり口には、「駒潰」についての地名説話が書かれた案内板が建てられており、それには馬が東駒ヶ岳から西駒ヶ岳へ飛んだ際に、飛びきれず、ここで潰れたという説明になっている。

上伊那地方にはこの「駒潰」のほかに「駒隠」（こまがくし）が二、三ある。しかし両者の「駒」と「つぶれ」あるいは「かくし」との関連がわからないまま、現地調査や聞き取りを続けていた。ところが明治初期の長野県の地名資料から「諏訪隠」（すわがくし・下諏訪町）と「浅間隠」（あさまがくし・軽井沢町）の存在がわかり、解明の

めどがついた。この「諏訪」と「浅間」は諏訪湖あるいは浅間山を指すに違いないと考えられてきた。

そこで「駒隠」の現地（箕輪町帯無川河畔）を調査すると、そこは窪地で、この地域ではどこからでも見えるはずの駒ヶ岳が見えないのである。この場合「駒」は「駒ヶ岳」を指し、「かくし」は見えないことを言い、駒ヶ岳が見えない地点をいう地名に違いないという結論に達した。

一方、同じ「駒」の文字がつく「駒潰」の「つぶれ」は何を意味するかわからないまま、注意していた。あるとき、現地で八〇歳代の方から「駒潰」についての話を聞いていたときのことであるが、その人の「駒潰」の発音は「こまつむれ」であった。これを聞いた瞬間、私の驚きは大変なものであった。というのは、「つむれ」とは目を瞑ること、すなわち何も見えないことなのである。そして「駒つむれ」の地からは、この辺りのどこからも見える駒ヶ岳が里に近い山の陰に隠れ、見えないのである。そうなれば「駒隠」も「駒潰」も共に駒ヶ岳が見えない地点をいう地名というところで、同じ性格の地名となる。この事実から、往昔は「駒潰」の発音は「こまつむれ」の可能性が高く、後にこれは「こまつぶれ」に訛り、これに対して「駒潰」の文字をあて、さらに「駒潰」の地名説話が生まれた



写真 駒隠 (こまがくし：箕輪町)
右側の段丘で駒ヶ岳が見えない

可能性がある。

この同じ性格の地名「かくし」と「つぶれ」の分布地域については、すでに述べたように「かくし」は上伊那中部以北で諏訪から東信にも見られる。一方、「つぶれ」のほうは、その後中川村前沢に「駒つむり」「駒つむり下」の分布がわかった。このように

文字で見る限りでは、何か神社関係の地名の感もある。事実、ここにはいくつかの地名起源説話があり、その中には神輿置き場とするものもある。しかし近くに神社はなく、腑に落ちない点もあり、別の視点から模索を続けた。そのうちに同村内南殿の大泉川に「越場橋」があることがわかり、解明の糸口をつかんだ。この越場橋の「越場」というのは川に橋がなかったころ、渡河する際に利用された地点の地名である。かつて「越場」は極めて多い地名であったが、現在では急速に失われつつある。こうした渡河地点の特徴は、川幅が狭かったり、川の中に大きな石(川越石)があつて、これを足場に跳び渡ったりした所だということである。

「神子柴」に戻るが、これは「み」と「こしは」の二語によって合成されていると思われる。「み」は「箕輪」「水内」「水面」等に見られる「み」で、川、水のことである。次の「こしは」はいま述べた渡河地点を言つた。

そうなると「神子柴」は川を渡るところを言つた地名と考えられる。それにしても「神子柴」が渡河地名とは、とても文字からは想像もつかないことである。

まず現地の様子を見ることにする。「神子柴」集落南の川として、大清水川が西から東に流れている。ここでの川

「つむれ」「つぶれ」の方は上伊那南部以南に分布している
よつである。

事例 4 みこしば(神子柴)
上伊那郡南箕輪村南部に「神子柴」がある。この地名を

幅は約一・五メートルと狭い。南から北上する旧伊那街道は御園から神子柴に入り、大清水川を渡る。ところがこの道は、川を渡る直前、川に沿ってその縁を約五〇メートル川下まで迂回し、川幅の狭いところを渡っている。この事実は大いに注目すべきことである。そして渡河後は北に真っ直ぐ通じている。

このような状況から「神子柴」という地名発生地点は伊那街道が大清水川を渡る地点と考えてよいであろう。

事例 5 あかほ（赤穂）

駒ヶ根市竜西側には「赤穂」があり、かつては赤穂町制を敷いていた。「赤穂」は現在も駒ヶ根市の大字として残っており、赤穂小、中学校もある。この「赤穂」は古くからのものではなく、明治八年（一八七五）に赤須村と上穂村が合併の際、両村名から「赤」と「穂」の一字ずつをとって命名された地名である。

明治初期にも政府からの町村合併が盛んに勧奨された。それによって各地で江戸時代以来の小規模な村々の合併が盛んに行われ、その結果、村の数は激減した。この時期、どこでも赤穂と同じような現象が起きているので、二例を次に挙げる。

事例 6 あさひ（朝日）

辰野町の竜東側には明治八年から昭和三〇年にかけて「朝日村」があった。この村名成立の事情を見ると、この地域には旧赤羽村・沢底村・平出村・樋口村があった。明治八年これら四村の合併時に、四村名の頭の一音「あ」「せ」「ひ」からとって村名を「朝日」とした。この例は「赤穂」と異なり、旧村名の音からとった例である。これと同じ例として、「豊科」（とよしな）（鳥羽・吉野・新田・成相）、^{なりあい}「読書」（よみかき・南木曾町）（与川・三留野・^{かきそれ}柿其）がある。

このように、旧村名から文字や音をとって新村名として命名する地名は合成地名といっている。「赤穂」の場合は文字による合成地名、一方「朝日」「豊科」「読書」は音による合成地名ということになる。

私たちは慣れ親しんでいたものから、新しいものに移るとなると、かなりのためらいを感じる。また元のものへの愛着を断ち切ることが難しいこともある。ここにあげた村の合併の際に成立した合成地名の例はこれを物語っている。

事例 7 さかえちよう（栄町）・ちゅうおう（中
央）・みはら（美原）

地名は基本的にはその土地の地形や人々の暮らし、歴史等を背景にいつの間にか誰言うことなく自然に発生したものである。しかしここに挙げた命名地名例はこれとは違い、その地域の歴史・伝統とかかわりなく人為的に名づけた典型的な命名地名である。つまり命名地名は、地域の伝統・歴史とのつながりを断ち切り、ひたすら現在と未来の繁栄と発展、さらには好ましい環境形成等を願望するものが多いようである。このような例は新しい住宅団地造成や市町村合併・町名変更等の際し、命名されたものが多い。

駒ヶ根市の「上穂栄町」「中央」、伊那市竜東の六道原に造成された「美原」団地等はその例である。

事例 8 しんでん（新田）

私たちは日頃「新田」という地名に接することが多い。

この地名には、その頭に別の地名もしくは人名等がついていることが多い。さらに集落の中に入ってみると、その一部を「新田」と呼ぶ例もよくある。

ところで、この「新田」という地名の成立の事情・由来は他と多少異なっている。これは江戸幕府の耕地開発政策で使われた用語や措置が地名になったもので、基本的には江戸時代以降に開墾・開拓された田畑・宅地が公認され、

検地帳に登録された土地のことである。これはまず役人の側が使い、それが一般の人々に伝わり定着したと思われる。これと似通っている成立の事情を持つ地名として、「割地」（別項「割地」参照）、「太鼓免」（祭免）、「番匠免」（「免」は年貢減免対象地とみられる）等がある。伊那地方に多い地名の一つの「垣外」（別項「柿外土」参照）もこれらと性格をほぼ同じくすると思われる。

(二) 地名の拡大

長野県をいう「長野」という地名の発生地点は現長野市善光寺の門前周辺の長門町辺りといわれている。この辺りは中世から江戸期にかけて「長野」と呼ばれていた。その後明治四年（一八七二）に信濃国は「長野県」（東北信地域）と「筑摩県」（中南信地域）に分かれ、長野県庁は「長野」に、筑摩県庁は「松本」に置かれた。しかし明治九年（一八七六）の筑摩県庁の火災消失を機に筑摩県は廃され、両県の区域に「長野県」が成立し、県庁は当時の「長野町」に置かれた。これによって「長野」という名は現在の長野県全域に拡大した。

なお伊那地方の「なが」地名としては「長田」「長岡」（以上箕輪町）、「永見山」（駒ヶ根市）、「長野原」（飯田市）

がある。これらの場所の共通点は、長い緩傾斜地形であり、「なが」地名の由来は流れるような緩やかな地形によると考えてよからう。

(三) 地名の移動

東京には「銀座」がある。ところが飯田市にも「銀座」があるほか、県内各地にも見られる。この現象は股賑いんじん繁栄する東京の「銀座」にあやかり、同様に繁栄を願って命名した場合が多い。つまり東京の「銀座」地名が移ってきたことになる。

高遠町上山田には「芝平」「しびら」があり、同町三義にも同様に「芝平」がある。後者の三義地区の「芝平」は地すべり危険地帯のため、昭和五三年ごろ上山田へ集団移住した。そして移住した人々は新住地でも旧住地の地名「芝平」を称している。つまり「芝平」という地名が移動したわけである。このように地名は移動することもある。

(四) 地名と苗字との関係

私たちは時に自分の苗字と同じ地名に出会うこともあるが、両者は関連があることが多い。日本では古くから自分の住地の地名をもって呼び名とすることが行われた。たと

えば木曾義仲、伊那の勘太郎（実在ではない）など。

昔から人を住地名で識別し、その地名で呼ぶのはごく自然のことのようである。巷間よく言われることだが、たとえば「箕輪」は箕輪氏という武将がいたので、というが如きことを聞くことがある。けれども基本的には人が住むようになれば、まず地名が生まれると考えられる。その後人々はその地の地名をもって自分の呼び名とするようになったと考えるのが妥当のように思われる。

(五) 地名の役割・特性

地名についてこれまで述べてきた点をまとめ、地名の特性・役割を列記する。

地名はその土地の呼び名であることは言うまでもないが、その根底には地域の先人の足跡や生活の営みが潜んでいるということである。いかなれば地名はその土地の履歴書であり、その土地の歴史の鏡だとも言える。また地名は先人の暮らしの様子だけからではなく、その地の地形・地質・立地条件等の特徴を始め、信仰・娯楽等々を基に生まれている。こんな点を考えると、地名はその土地の顔だともいいうことができる。

地名と話し言葉の特性

地名の本体は話し言葉（発音）で、地名の文字は仮の姿である

したがって地名の由来を考えるときは文字ではなくその発音に目を向けなくてはならない。

地名はその土地の履歴書である

事例 4（神子柴）のように、この由来が渡河点をいい、この地名の前後の道筋が明らかにになると、旧伊那街道のコースが鮮やかに蘇ってくる。つまり地名はその土地の歴史の復元に大きく貢献できるということである。これこそ実に大きな地名の機能である。

話し言葉（発音）の特性は、その形がそのまま変わらずに未長く伝えられていく

事例 2（古寺） 3（駒潰）のように耳で聞いた言葉はその発音、音調はそのまま長く伝えられるという特性があることを示している。たとえば方言は地域の人すべてが同じ調子で話し、ことわざでは「門前の小僧習わぬ経読む」があり、これらはその具体例である。

地名の最大の特徴は、なんといつてもその地を離れては成り立たないということである。さらに地名はその土地で暮らしているごく一般の人々の間から生まれるので、その基盤は人々が日常話すその土地の言葉である。要するに、その土地の言葉が母体であり、あくまでもその土地で生まれたということに意義があるし、貴重でもある。

以上のように、地名はあくまでその土地を基盤にし、その地の自然・暮らし・言葉等々の生活全分野を基盤にして生まれ、それが今日まで伝えられてきたものである。つまり、地名はその地にとっては極めて重要な文化財ということになる。

さらに、地名の成立を考えると、地名は極めて土俗的・庶民的だという点である。つまり地名は人々の普段の暮らしそのものを反映しており、ありのままを表現していることが多い。このため歴史資料としての利用価値も高い。

（六） 地名保存の必要性

地名は先人の暮らしの中から生まれ、その暮らしの中で使われ、暮らしと共に伝えられてきた。したがって人々の暮らしの様子や歴史の復元には必要不可欠で、その重要性については言を要しない。私たちは貴重な地名を、先人が

伝えてきたと同じように、後世に伝えていく義務があるう。

近年、社会情勢の変容に伴い、古くからの地名が消滅する機会が増している。土地利用の変化に伴い、旧来の地名の統合・整理が行われ、これにより大量の小字の消滅が憂慮される。その対策として、これらの小字名とその位置を地図上に残し、将来の地名・歴史研究等の資料として保存することは極めて重要なことである。

二 個々の地名の由来を考える

(一) わりち(割地)

伊那市野底の天竜川東岸堤防に接して「割地」という地名が地域の資料上にある。ここは天竜川へ棚沢川が流入する地点のすぐ下流である。この辺りは遠い昔から水の猛威にさらされてきたところで、別項で述べる当地区の常襲的水害被災地「柵立」もすぐ北に隣接している。

一方、伊那市上新田の三峰川南岸の堤防に接して、「六間割地」「四間割地」の地名が見える。この一帯は現在堅固な堤防で固められ、土地改良も行われ、整備された水田地帯になっている。

さらに左岸の伊那市車屋には「八丁割」があり、これも「割地」地名の一つとみられる。

今日、「割地」地名の地に立つても、この辺りがかつての水害常襲地域であったことなど直ちに理解しがたいほどである。しかし往時の堤防が貧弱かつ小規模であったことを思えば惨禍が繰り返されたことがわかる。

まず「割地」という地名の由来と性格に触れなければならぬが、この地名は多くの発生地名とはその成立事情を少々異にしている。つまり、発生地名の多くは誰言つとなく、いつの間にか



写真 「六間割地」・「四間割地」(伊那市上新田)
堤防の奥は三峰川

使われ始め、それが定着したものである。これに対し「割地」は、当時の幕府あるいは藩に公認された災害復旧制度の呼び名であり、これに基づいて幕藩側の指導により村が施工主体になって、田

地割替制（割地制）が適用され、工事が行われた地のことである。「割地」制の成立時期は江戸時代以降といわれるので、この地名の成立も比較的新しいが、その内容を一通り見ることにする。これは水害だけでなく冷害・早魃などによって収穫量が減少した場合にも適用された。

「割地」制は田の地味の良否によって同じ面積でもその収穫量に大きな差異が生じた場合、年貢負担をなるべく公平にするために、その地域の水田所有者を割りかえる制度である。元来、水田の所有者（耕作者）は固定しているのが普通であるが、この制度では村が定めた期間、五年とか一〇年ごとにそれを替えていくというものである。割り変えに際しては、村によっては、くじ引きで決めるといいう方法が採られた例もあるという。所有者を回していくことから、その田のことを「車田」ということもあったという。

次にもう少し「割地」制の運営を具体的に見ることにする。

上伊那地方における「割地」制は、六道原や段丘上の開墾の際にも適用されたらしく、生産が不安定な初期の段階に適用された例がある。しかし、ほとんどが水害の復旧事業に適用されていたようである。

多くの河川を擁する伊那地方では、資料上に見える水害

は江戸時代に限っても優に百回を超えていて、江戸末期にはほとんど毎年のように起きている。

被害が大きくなると、多くの場合、個人の力で修復することは不可能であった。当時の社会基盤は農業、特に米であり、農地の流失は百姓ばかりでなく、武士社会を含めて社会基盤を揺るがす事態になる。特に百姓にとつては深刻な問題で、潰れ百姓となつて村を離れざるを得ないことにもなりかねない。そうなれば、村にとつても、年貢に依存する支配者側にとつても、容易ならざる事態である。つまり農民も支配者側も災害復旧は緊要なことであった。この災害復旧の具体的な方法は、各地域の実情に応じた方策が採られたとみられるが、基本的な方法を以下にあげる。

流失耕地をまず村あるいは関係者の共有にし、これを均等面積に区画する。伊那市上新田の「六間割地」「四間割地」という地名は均等に分割した区画の名残りであろう。

一方で、被害を受けなかった生産可能な地区の水田も均等に区画する。そして両者を組み合わせ、これを各人の所有耕地面積に応じて配分するというものである。こうすることによって各個人は幾分か生産可能な土地を持つことになり、当座を凌げるのである。この割地制は、水害の被害を個人でかぶるのでなく地域全体で負担するというもので

ある。

このような制度が実際に機能する前提として、村の連帯感・一体感が根底になくしてはならない。改めて考えてみると、江戸時代の村の規模は小さく、まとまりのよいものになっていたことも幸いしていたかもしれない。さらに幕府の支配統制理念の根本に、この水害のようなものばかりでなく、年貢の収取、治安、農民把握等の問題を見越した、村の規模にまで及ぶ周到な構想に基づき手が打たれていたとみるべきであろう。

(二) どば (渡場・土場)

伊那地方には、南北に貫流する天竜川と並行してその東西には相対する三〇〇メートル級の赤石山脈と木曾山脈が連なっている。これらの山地は標高の高い部分は別にして全体が大森林地帯を形成し、良材の宝庫であり、天竜川水系の水源地帯であった。そして興味深いことに、主だった流入河川の合流点には「渡場」「土場」という地名が目立つ。たとえば、三峰川流入点の「殿島渡場」(伊那市東春近)、小渋川流入点の「葛島渡場」(中川村)、遠山川の流入点の「満島渡場」(天龍村)等がその例である。このほかに、川の渡河に適したところ、川が淀んで木材

の集積に適したところなどに「渡場」「土場」のような地名が見られる。これらの「渡場」は、川に臨む交通の要衝、渡河点であり、森林地帯から川の流れを利用し、搬出されてくる木材を集積し、さらに下流に川下げした中継基地であった。

地名「渡場」は江戸時代から近代・現代に及ぶ時期の天竜川と伊那の人々の暮らしや産業に深いかかわりのある地名なので、ある程度細かく見ていきたい。

「渡場」成立の
時代背景

時代は少々遡るが、豊臣秀吉は天下を掌握した後の天正一六年(一五八八)に刀狩令、その翌年には総検地を行い、全国支配を実効あるものにした。刀狩は農民の武装解除であり、彼等から戦力を奪うものであった。また検地により土地への支配を強めた。徳川政権もこの兵農分離政策を継承し、これを推し進めた。さらに、武士はこれまで住んでいた農村に住むことを禁ぜられ、家の子弟党との主従関係を断ち切れ、城下町に住むことを余儀なくされた。このようにして武士は土地・百姓と切り離され、サラリーマン化し、もはや一旗挙げることもできなくなった。つまり、これによって幕府への対抗勢力はなく

なったのである。そしてこのような政策の進行は伊那地方にも大きな影響を及ぼすようになる。

徳川政権は早くから伊那地方の山林資源に目をつけ、すでに幕府開府以前の慶長五年（一六〇〇）ころ、朝日受永を代官に任命して林政を司らせた。幕府の意を戴した彼は、上、下伊那の各地に樽木成村くればきなりむらを設定し、建築材の確保に努めた。樽木というのはヒノキ、サワラ、スギ等の良材の建築材・屋根材を言い、これらを年貢として納める村を樽木成村といった。幕府はその後、引き続いて享保一九年（一七三四）まで、千村平右衛門に樽木成村（上六ヶ村・上穂・小野・手良・野口・八ツ手・中坪、以上金納。下六ヶ村・鹿塩・大河原・清内路・小川・加加須・南山、以上現物納）を支配させた。

天和三年（一六八三）、川下げされる木材の増加と共に、大久保村（現駒ヶ根市東伊那）の天竜川の中島に木改番所きあためが設置され、川下げされる木材の木改めが行われた。木改め役は一般人が起用され、三峰川関係は黒河内家、天竜川では大久保の中村家であった。大久保番所ができる前は殿島渡場へ役人が出張してきて木改めを行ったという（信州伊那社会史¹）。

樽木の意味 「くれ」という語は、みかんの袋、桶にする板、屋根を葺く板、木の切片等の意味がある。これらの例から、「くれ」は木材を剥いで板状にしたもので、無節の木を丸太切りにし、それをみかん割りにし、外皮の部分と芯の部分を取り去つたものだという。

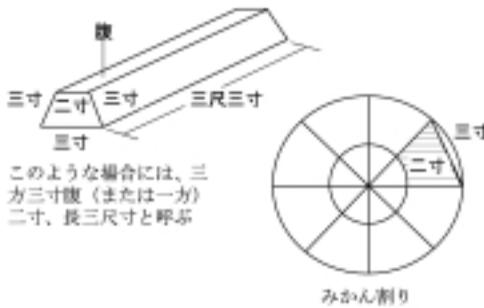


図 樽木の割り方・寸法

樽木の用途は、屋根を葺く屋根板。これは樽木を薄く剥いで作つたとみられる。室内用材に使われた。これらはいずれも柾目の良材が要求され、サワラを主体にヒノキ・スギ等が用いられ、中でも、サワラは水に強いので屋根板に適した。

樽木の納入は三年毎（七年もある）、その支流が天竜川

に合流する地点の渡場に渡入れし、検分を受け「上」（價格、米八合）、「中」（六合）、「下」（五合）、「下下」（三合六勺）、「刎ね木」（一合七勺）の五段階に分類され納入となった。

各渡場から放流された樽木は管流し（筏に載せることもあった）によって天竜川の下流に流された。これに対して下流の舟明（左岸）と日明（右岸）の間に留め綱を張り、一旦はここで引き上げた。その下流は筏もしくは舟によって河口の掛塚湊へ運ばれ、そこで船に積まれ各地へ運ばれた。

これらの渡場の所領関係は、一部には私領であった時期もあるが、樽木の積み出しが盛んなころはすべて幕府領であった。伊那地方は、江戸時代において東日本屈指の樽木の生産地であったことが大きな特徴である。

渡入された樽木の量・渡入れ指示量（享保一〇年）

総量 六〇万三三〇〇挺（二〇万九〇〇挺）

内訳

葛島渡場 一一万挺

（四万挺 鹿塩・大河原分）

下瀬渡場 一一万挺（三万三〇〇〇挺）

万古渡場 三万五〇〇〇挺

（二万一六〇〇挺 小川加加須分）

満島渡場 三四万八二〇〇挺

（二万六〇〇〇挺 遠山分）

（ ）内は享保一一年（『伊奈郡郷村鑑』）

弁財天河原

渡場（高遠町）

中世までの三峰川上流部は全く手の加えられない森林地帯であったという。その後中世末以降、次第に伐採量が増加し、そのため正徳二年（一七二二）には乱伐禁止令が出るにいたった。これによって、それまでの木材の伐採がいかにも急激であったかが窺える。しかし一旦減少した森林資源はその後回復せず、減少の一途をたどり、樹種によっては絶滅するほどになったという。

ところで三峰川流域からの木材の搬出は、川沿いの地形・川幅等を考えると、一本ずつ流す管流しが主流であったと思われる。しかしどの辺りからとは限定できないが、川幅が広くなる高遠辺りから下流では、筏流しも行われていたようである。

寛保元年（一七四一）、高遠藩主の命により同藩士小山郡太夫の筆になる『高藩探勝』がある。これには藩領内の景勝五十二ヶ所が描かれていて、その中に「三峰川の筏」がある。これには絵と共に歌が添えられ、「やすからぬわざや かはせのなみ枕 筏のとこのゆめのうきよに」とある。絵には二艘の筏が描かれているが、共に一人乗りの小浮といわれるもので、その長さは短い。おそらく三峰川ではこの程度のものであったと思われる。

この歌は、川幅が狭く急流の中を下る筏の操縦に、かなりの技術を要し、危険があったことを歌ったものと思われる。



写真 弁財天渡場
(建物周辺、川は三峰川)



写真 三峰川の筏 (『高藩探勝』)

昭和初期の
弁財天渡場
高遠町の弁財天渡場では、昭和一〇年頃
まで奥地から管流しされてきた木材の集積
と積み出しが行われていたというが、江戸
時代の様子を知るのに参考になるので、当時ここで働いて
いた人の話を載せる。

上流から管流しされてきた木材は、弁財天河原渡場(弁
才天橋とその下
流天女橋の間約
二〇〇メートル
の左岸)に陸揚
げされた。木材
の陸揚げの方法
は、天女橋付近
から上流に向け
て牛棹を入れて
淀みを造り、流
れてきた木材は
その淀みに溜め
られた。それを
「とびかぎ」で
引っ掛け、左岸

の渡場に引き上げて並べた。木材は末口を西に向けて並べられ、樹種・規格・数量等の検査と確認が行われた。昭和初期、ここへ管流しされてくる木材はシラビソのような雑木が多く、その長さは総て丈三（一丈三尺、一丈は一〇尺、一尺は三〇・三センチメートル）で実際にはこれより約三〇センチメートル長かった。これら木材は運送馬車で伊那北駅に運ばれ、貨車で各地へ送られた。木材が長く、そのままでは馬車に積めないため、運送馬車の前輪を車台から外し、それを木材の前の部分に固定し、木材に車台の役目をさせた（高遠町長瀬義治氏の談話の要約）。

木川と 三峰川上流部の戸台川・小黒川から川下げ

殿島渡場 された木材は、川の湾曲部に設定された杉島

岩入や戸台川・黒川等の貯木渡場に集められ、下流の弁財天河原の渡場へ管流しされた。そしてここで検分を受けた後にさらに天竜川に向けて管流しされた。筏に組んで川下げされた。

ところが、これらの木材は天竜川合流点に達する直前、つまり現竜東橋の上流約三〇メートル辺りから人工的に開削された「木川」に流し込まれた。この「木川」については『東春近村誌』を中心に、聞き取りや踏査してみる

と概ね次のようである。

「木川」は三峰川から分かれると、南西方向へ約三キロメートルの天竜川に近い「渡場」の「ぐみ島」にまで至っていた。木材は一旦ここで引き上げられ集積されたという。この集積場は「木挺場」と呼ばれ、面積は一町七反三畝一〇歩（約一・七二ヘクタール）であった。この木挺場は現在ののぐみ島集会所の周辺だといわれるが、構造改善事業の実施により往時の面影をとどめていない。ただ木川の跡といわれる約三メートル幅のコンクリート水路があるにすぎない。

三峰川上流での伐採の進行によって、森林資源は枯渇



図 木川概念図

し、川下げされる木材は減少し、文化八年（一八一二）には木挺場は廃止となり土地は水田になった。元文三年（一七三八）の『木挺場使用料紛争資料』によると、川下げが行われない年でも木材を置く場合は借地料の半分を支払うように決められていたとある（『東春近村誌』）。この例から、すでにこのころ常時川下げが行われていたとは考えにくい。

木川の流れば、三峰川から車屋、中組、渡場までの延長



写真 ぐみ島付近の木川跡

約三キロメートル余、資料では川幅八間（約一五メートル）であった。地元の人と共に木川周辺を踏査してみると、この周辺の地形は低い。往時三峰川の洪水氾濫によって災害が繰り返されたところだという感を深くした。そして辺りには、三峰川の流路になったと思われるところもあつた。たとえば現在の車屋集落センターの前には、「川除（堤防）跡」の標柱が立てられているので、かつてはこの辺りまで三峰川の流れがきていたことになる。

車屋集落を流れる現在の木川は、幅約五〇センチのU字溝の流れに過ぎず、さらに南に行くとは構造改善事業の区画整理によって残されていない。この踏査を通して、ひとつの疑問がわいてきた。それはなぜ川上から流送されて来る木材を直接天竜川に流し込まないで、三峰川から西南三キロの間に人工の水路まで掘って天竜河畔の渡場のぐみ島まで流送したかということである。

資料を調べているうちに、興味あることに出会った。正保年間（一六四四—一六四八）制作とされ、この地域最古といわれる『信州伊奈郡之絵図』（『脇坂絵図』）の中で、現伊那市街の「入舟」近くの天竜川のところに、「水干二テ八歩渡ル」とかすかに朱書されているのが読み取れる。これは水が少ないときは歩いて渡るといふことであろう。

これによると当時天竜川には水量が極端に少ない季節があったとみられる。このような天竜川の水量が少ないときは、当然管流しにも支障が出る。そこで考え出されたのが三峰川の流路跡やそれに近い低地という地形を利用して、木川を開削したと考えられるのである。すなわち、天竜川に水が少ないときには、木川に木材を流し込み、この中に貯木し、水量の多い時期に筏に組み、時には管流しによって渡場から天竜川に流したと考えられるのである。

この点について、まったく別な次のような見方もある。天竜川と三峰川の合流点付近は今でも季節によって「瀬切れ」があるという。理由はこの付近で三峰川の水が伏流して水量が少なくなるといのである。そのため木材の川下げに支障がでたのではなからうかというのである。今ここで結論を出すことはできないが、共に興味ある問題である。

殿島渡場

(伊那市)

伊那市殿島渡場は森林地帯である三峰川上流部を後背地に持つており、そこから伐り出されるマツ・モミ・ツガ・クロベ(ネズコ)(以上黒木)、スギ・ヒノキ・サワラ(以上青木)など多くが木川を通し、この渡場を集められ、集積されたとみられる。

る。

天和三年(一六八三)に大久保木改番所が設置される前は、ここに藩役人が出張してきて木改めが行われた(『上伊那誌』等)。検査内容は樹種・数量等を確かめて課税台帳(「運上」という雑税)に記載し、刻印を捺して、下流に川下げされた。この殿島渡場が盛んであった時期は江戸中期ごろまでで、その後は資源の枯渇により、文化八年(一八一二)木川は閉鎖されるに至った。

木川と

寒天製造

地元での踏査の中で、大変興味深い話を聞いた。昭和二〇年ごろ、木川沿いに五・六軒の寒天工場が操業していたといのである。これらは木材を流さなくなった木川の水流を利用して水車を廻していたという。水車と寒天の関係を寒天メーカーに尋ねてみると、寒天製造では原料のテングサを搗く工程があり、この際水車を利用するのがよいという。木川でいところから水車が利用され始めたかはわからないが、文化八年(一八一二)に木川の木流しが停止になったとき、その川の利用について人々は英知を絞ったと思われる。地元によると、近年までこの地域では水車が様々なことに使われていたというので、この寒天製造に利用されたのもその中

の一例であろう。いずれにしても川幅一五メートルの流れを放置するはずがなく、地域の実情に応じた様々な利用法が考えられ、行われたに違いない。このようにして新しい文化が芽生えることになる。

大久保材木改番所
(駒ヶ根市東伊那)

天和三年(一六八三)、大久保材木改番所が設定され、同地の中村新六家が改め役に任命された。番所の

位置は、現在の久保橋のすぐ上流の中島の辺りだといわれている。この位置は小田切川の合流点より下流、太田切川の合流点より上流である。この位置から考えると、小田切川流域の用材が重視されたことが考えられる。太田切川上流の黒川周辺は良材が豊富で、かなりの量が出されたようである。これらは小田切川や現宮田村内の小河川を通し、川下げされたという。小田切川はかつては「大川」「中川」とも呼ばれ、丸山井の上流部は「木川」と呼ばれたという(『上伊那誌』)。ここにも「木川」があったことになる。しかし、大久保番所はなんといっても三峰川筋からの木材のほうが多かった。

当時、どこの番所も関所的な機能・権限を持っており、この番所も筏や舟による一般生活物資の検分なども行った



写真 大久保材木改番所跡付近

という。大久保番所の設置の目的は次のように考えられる。町人請負による山出しされた木材に対する課税(分^{いち}・荷の価格の何分の一かを荷主から徴収)を行うため。

川下げ中の流木の盗難防止。盗んだ者は欠所・打ち首の刑に処せられることになっていったという。番所には定紋を染め抜いた幔幕が張られ、火縄銃二挺・弓二張が備えられ、木改役には十手が与えられていたという。大久保番所木改役という職は、当地方としてはかなりの権勢を誇っていたらしく、平

成の現在でも、「新六様」と呼んでいる人もい程である。

葛島渡場

(中川村)

中川村最南部の葛島と松川町との境界に接して「渡場」という地名がある。ここは、大鹿方面から流れてきた小渋川が天竜川に流入する合流点である。この小渋川の上流域には大河南山・鹿塩山があり、木材が豊富であった。中世以降江戸時代には、これらの山から大量の樽木くれぎが割りたてられ、小渋川・



写真 小渋川合流点
(「空から見た天竜川」より)

青木川の流れを利用し、川下げされた。これらの樽木や木材はこの渡場に一旦集積され、ここでも役人の検分を受け下流の満島(現天龍村平岡駅の西、段丘下の天竜河畔)の白木改番所へと川下げされ、そこでも検分を受け、さらに遠州へと送られた。

ところで別記「樽木」で述べてあるように、享保一〇年

(一七二五)

および一年に幕府の千村役所から葛島渡場への渡入れ(山から伐り出し渡場へ集積すること)指示数量は、それぞれ十二万挺(「挺」は長い木が原義、具体的にはわからないが、樽



写真 葛島渡場跡
(右：天竜川、奥：小渋川)

木割りたて前の原木か」と四万挺でかなりの数量になっている。これだけのものが小渋川に流れ込むので、中には岸や岩に引っかかるものもあった。そのため、川沿いの村に對し、樽木を円滑に川下に流す人足（川狩）を課した（『生田村誌』）。

かつての葛島渡場の地は天竜・小渋両河川に面しているので、小渋川上流からの木材を引き上げ検分したり、集積して、さらに下流へ流送するのに好適の地であった。

近代以降の
葛島渡場

これまで見てきたように、葛島渡場は木材の川下げの中継基地として江戸時代を通して重要な位置にあったが、この役割は明治以降、世の中が大きく変わる中、どのように推移したであろうか。

久原鋳業会社の林道・索道の開削

明治以降、人々の暮らしの変容は、以前にも増して木材の需要を増大させた。これに心じて、渡場奥地の大原・鹿塩方面の木材が注目されるようになった。大正六年（一九一七）久原鋳業が大河原に進出し、木材を大量に伐りだすようになった。そして葛島渡場付近は江戸時代と同じよ



写真 部奈策道の起点
（高い木立のところ）

うに搬出のための中継基地の機能を果たすようになった。

同八年になるとその木材搬出のために、奥地から部奈（生田村）間にトロッコ道を開

削し、さらにその翌九年、部奈から天竜川を越えて、上新井（松川町）の富士森との間に空中索道（ケーブル）を敷設した。このケーブルは、さらに上片桐駅にまで延長され、大鹿からの木材が一日に二〇〇石余も積み出されるに至った（「石」は形状にかかわらず一〇立方尺の体積の材木）。

製材工場の進出

一方、大正四年清水市の福島製材所は葛島渡場に支工場



写真 川狩 (明治30年)
引っかかった材木をヒヨウが流す
(喬木村教育委員会『竜東策道』より)

「川狩り」と呼び、江戸時代と同じ呼び名が行われた。この時期でも最盛期には川狩り人夫（「ひょう」と呼んだ）が二〇〇人もいたという（杉岡一夫氏・片桐富士雄氏談）。大正・昭和期の木出し

を開設した。ここでは小渋川奥地の山林から伐りだされる木材を、江戸時代と同じように小渋川の流れを利用して川下げした。流されてきた木材は工場上流二〇〇メートルの渡場水神碑の地点から幅約四メートルの水路を開削し、その中へ流し込み、工場敷地内の貯木池に入れられた。

開削された水路は木材を流すだけでなく、その水流を利用して、水力タービンを回し、その動力で製材機を稼働させたという（杉岡一夫氏談）。

木材を山から出すとき川を利用したが、途中で引っかかることが多く、このために「とび」でこれを外す作業

と江戸時代のそれとの間に大きな違いがないばかりか、「川狩り」「ひょう」のような呼び方まで同じなものもきわめて興味深いことである。伊那地方では、随時、随時に働くこと（人）を「ひょうとり」と言ったが、この「ひょう」（日傭か）と関連がありそうである。

満島渡場

（天龍村）

満島渡場は遠山川と天竜川の合流点から遠山川を少し遡った地点であった。平岡ダムができたためにこの辺りの様子はかなり変わってしまった、今は渡場の現地を見ることはできない。現地での話によると、現在の竜東線に架かる橋の下辺りを「渡場」と呼んでいたと言っているので、満島渡場は満島白木改番所（番所）の地点より北へ、小山一つ越えた平岡ダム湖の砂利採取場になっている地点が考えられる。そしてここに数本の堤防を築いて淀みを造り、遠山川上流からの管流しされてきたものを集め、引き上げ、検分が行われ、刻印が打たれた。ここから下流は筏が主であったが、管流しも行われたという。川下げされる木材の多くはここを経由するので、最も重要な渡場であった。

満島番所の位置は渡場より下流、満島の寺院、自慶院の下、天竜川に臨む小高い傾斜地にあったという。また木材



写真 改番所跡付近



写真 満島白木改番所跡（遠山家）

島」があり、三分された島、すなわち「三ツ島」に対して「満島」の文字を当てたのである（遠山景政氏談）としている。いずれにしても「満島」は「みつ」の音から川沿いの地と言う地名と思われる。

『遠山家資料』天龍村史』等によると、幕府は元和元年（一六一五）に満島に白木改番所を設置した。この近くでは梁木島（南信濃村）にも番所が設置され、明治八年（一八七五）まで存続した。これらの番所は小規模な関所である口留番所とみられ、課税する権限もあった。満島の場合には木材が大半を占めていたが、中には中信地区波田のたばこのような品物も通っている（『遠山家資料』）。

や荷の検査を行う「改場」は番所の南、天竜川畔に置かれていたという（略図参照）。

地名「みつしま」（満島）の由来については、ここには東側から「洞沢」「宮沢」「村沢」があり、これらが地域を三分している。「島」については、天竜川沿いに地名「川

年代	筏数 (双)
延宝 7	4755
天和 元 2	4255
" 元 2	3841
貞享 元 4	3670
" 元 4	6754
元禄 3 3	4113
" 4 3	3511
" 5 5	4541
" 7 7	3779
" 8 8	3092
" 9 9	2204
" 11 11	4367
" 12 12	3310
" 14 14	3520
" 16 16	2934
宝永 2 2	3560
" 4 4	2650
" 5 5	2930
" 6 6	2321
" 7 7	1870
正徳 元 2	1632
" 2 3	1733
" 2 3	1334
" 4 4	2157
" 5 5	1424
享保 元 2	1791
" 元 2	2585
" 3 3	1534

表 満島番所通過筏数 (『天龍村史』)

も筏や筏に物資を積んで遠州方面へ運ばれていたが、別表

筏流し

天竜川で筏流しが行われたのは、かなり古くからのことである。既に室町時代の文明一六年

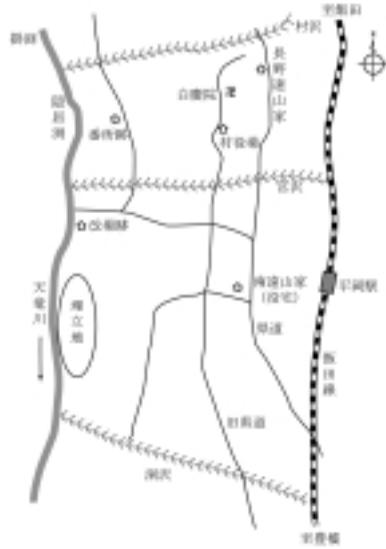


図 満島番所跡周辺概念図

「満島番所通過筏数」でもわかるように、筏流しの最盛期は江戸初中期であった。

ところが明治になって事態は急変する。明治三年（一八九一）、佐久間村中部に王子製紙工場が建設された。これに伴って周辺の山林からバルブ材が盛んに伐りだされるようになった。最盛期には二二〇〇人もの伐採入夫が入り込み、毎日四〇艘、多いときには一〇〇艘の筏が下った。そして遠山・満島の町は大いに賑わい、満島の町では夜はもちろん、朝からピーひやら、ピーひやらであったという（『天龍村史』）。

当時筏流しに携わっていた人の回顧談によれば、小学校高等科を出ると筏に乗せられた。びーびー笠に紺の股引、いなせな法被はびを着せてもらい、こうかけわらじ、背中にはめんぱの弁当袋を背負い、細身で長い鉈なたを腰につけた。中には絹の着物に、角帯を締め込み、防寒用の赤ゲット（赤毛布）を羽織るといふ者もいた。彼らは肩で風を切りながら、命を的に天竜の川波を突っ走るといふことに、男として生き甲斐を感じていた、と語っている。平岡村の明治二七年（一八九四）の水夫人口は七十七人、大正九年（一九二〇）には三〇〇人を数えたという（『天龍村史』）。

大正期の筏流しの様子（「天龍村史」）

当時周辺の山林から中部の王子製紙の工場への木材輸送は筏で送られた。たとえば熊伏山から伐り出された木材は木馬で満島の樫淵へ運び出し、ここで筏に組んだ。そして夜明けに乗り出し、約一〇里（四〇キロメートル）下流の中部の土場（渡場）に昼ごろ着いた。帰りは徒歩で二本杉峠、城西、水窪（泊まることもあった）と夜中に提灯をつけて歩き、大津峠、門谷、小和田、中井侍、小沢、鷺巣、満島を経て夜明けに家に帰り着いた。次の日は朝食後、樫淵か遠山川の「土場」（渡場）、時には万古川の土場（渡場）に行き、次の日の筏を受け取り、満島の自宅近くまで乗って来てそこへ留めておき、自宅で夕食、就寝し、翌日は夜明けと共に乗り出した。冬は腰まで凍ることもあり、夏は筏の上は焼けるようだったという。水が少ない時は浅瀬に乗り上げることもあった。

天竜川には処々に滝（流れが渦巻き、たぎるところ）・せり（巨岩に激流が当たる所）・釜と呼ばれる難所があり、こうした所で多くの人命が奪われた。当時平岡村だけで三〇余人の筏士が亡くなっている。筏稼業は高い技術と経験がものを言う命がけの仕事であったことがわかる。

すでに述べた三峰川での筏は一人乗りが普通だったと思

われるが、満島辺りの筏は二人乗りで、先のものが「舳乗り」、後ろが「艫乗り」といい、後の舳乗りのほうが練達した技術を要したという。しかし、最も重要なことは両者の息が合つことであつた。渦巻く激流では舳先が岩を避けても、艫が引つかかると、筏の後の部分がねじれてひっくり返つたり、ねじ切れてバラバラに解体してしまふ事にもなる。そういう時には「乗り換え」という離れ業をしたり、丸太に取りすぎるほかないが、失敗すれば遭難にもなりかねないのである。

筏稼業は大きな危険を伴うので、収入の方はよかつた。大正初期、ほとんどの家には時計がなく、朝、鶏の鳴く声で時刻を知るといふ時期、筏乗りの家には柱時計があつたという話もある。そして彼らの中には、時には稼いだ金を芸者遊びに賭けてしまい、手ぶらで帰るといふこともあつたという。

その後の満島渡場

中世以来、天竜川の流れを利用して木材の流送や時には舟による輸送が行われてきたことを、地名を通してひと通り見てきた。そして、天竜川がその時期に応じ、大きな役割を果たしてきたことがわかつた。ところが昭和六年（一

九三二)に泰阜ダムが建設され、中世以降の天竜川の流れを利用した筏流し・舟運等はその使命を終えた。また、昭和一二年には三信鉄道(現飯田線の一部)の開通、昭和三〇年代以降は天竜川沿いの道路整備が進み、鉄道輸送、自動車輸送の時代に入った。

これに対し、一時枯渴衰退した山の資源は、その後回復すると共に、生活様式の変遷によって、パルプ材の需要が高まってきた。かつてこの地域は榑木等の供給地としての機能を果たしていたが、時代が変わっても今度はパルプ材の供給という形でその伝統は引き継がれたのである。

地名「どば」

(渡場・土場)の由来

これまで天竜川と地域の暮らし・産業に密接にかかわる最も代表的な地名「渡場」を取り上げ細かく見てきた。では、この「渡場」の由来は何か、を考へることにする。

この地名が興味深い点は、「どば」は川沿いの地に分布し、特に大事なことは主な支流が天竜川に合流するところに立地していることである。現在、製材工場敷地内の木材置き場のことも「どば」と呼んでいる。江戸時代の資料によく見える「渡場」「土場」等の大半は山から伐り

だした木材を集積して置き、さらに下流に川下げする中継基地が多いことである。

からを総合すると、「どば」は木材集積場を言う地名の感が深い。しかし現地を踏査し、聞き取り調査等してみると、必ずしも木材集積所だけでなく、かつては渡河点であったことが浮かび上がってくるものが多く、現在



写真 中川村「渡場」
渡河点跡という

そこには橋が架かっている例も少なくない。

そもそも古い時期の「ど」(渡)は渡河点を言う地名と考えられる。たとえば「沢渡」「室渡場」の場合、前者は伊那街道が犬田切川を渡る地点を言う地名であり、後者は羽広道が小澤川を渡る地点を言う地名である。これらの「渡」は明らかに材木集積場ではなく、渡河点を言う地名と考えられる。

以上のように、「渡場」は、材木集積場、渡河点の二通りの見方が成り立つように思われるが、両者の関係はどうみるべきであろうか。

当地方において木材が伐りだされるようになったのは中世末以降、特に盛んになったのは江戸時代に入ってからである。木材集積場が設定されるほどになったのは、ほぼこの頃のことであったと考えられる。これに対し渡河点をいう「ど」「び」はこれよりずっと古くからの地名と考えてよいであろう。

つまり基本的には「渡場」地名のうち、中世以前に発生したものは渡河点を言い、江戸時代以降のものは木材集積場の可能性が高いのである。

(三) くるみぶち(胡桃淵)

辰野町辰野駅の駅舎真向かいの小道を東へ、道なりに進むと約六、七分で天竜川に突き当たる。この辺りの地名は「胡桃淵」といい、中高年の人の中には「くるみぶち」と呼ぶ人もいる。現在この辺りは住宅がかなり建てこんでいて、天竜川の川縁まで建物が建てられている。このすぐ上流には、胡桃淵の東対岸の平出上町に通じる清水橋が架かっている。ここは川幅が狭くなっている。ここから天竜川を見ると、両岸はコンクリートで覆われ川底は相当深い。尋ねてみると、近年浚渫したためだとのことであった。両岸には人家が多いにもかかわらず、水鳥群が泳ぎ

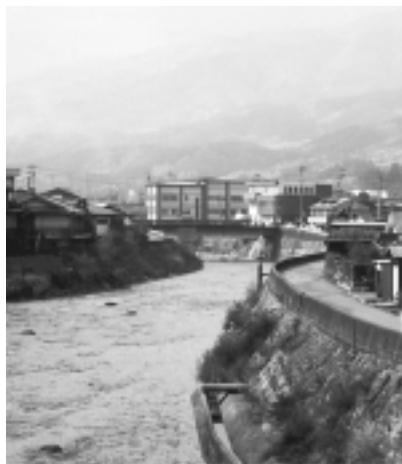


写真 胡桃淵(辰野町)

廻っている風景も見られた。古老の話によると、かつては川にすぐ入ることができ、川が身近で子どもたちの格好の遊び場であったという。彼らは泳いだり、魚とりに興じた昔を懐かしんで話す人もいた。

「胡桃淵」では、天竜川が清水橋の上流で一旦西に向かつて曲流した後、さらに「胡桃淵」のところで東に曲がり、再び西に向きを変えて流れている。「このように、「胡桃淵」の東側は丸く天竜川に突き出る格好になる。

「胡桃淵」の由来としてまず浮かぶものは、胡桃の実やそれがなる胡桃の木であろう。事実、地元でも昔は胡桃の木でも植わっていたのでしょつと言つ人もいる。しかし私は心底から納得できないものがあつた。

そこで、「くるみぶち」の発音に注目し調べてみると、「くる」の意味は、^え割る、廻るがある。用例では足の「くるぶし」「くるま」などがある。これらを念頭に置くと、天竜川の曲流によつて丸く突き出ていることに由来するのではと考えられてくる。「くるみ」の「み」は前述したように、水、川をいふと考えられる。「くるみぶち」の場合、「くるみぶち」がまずあり、その後、これが発音の容易な「くるんぶち」に訛つたり、あるいは日常生活の中に登場する胡桃という語に変化したりしたことが考えられ

る。言葉が変化していく過程は公式的な見方だけでは片づけられないさまざまな要素がかかわっていることが考えられる。いずれにしても辰野町天竜河畔の「胡桃淵」という地名は、川に向かつて丸く突き出た地形をいふ地名だと考えられる。当地方にはこの地名のほかにも、「くる」地名は「車屋」などが分布している。

(四) みわ(箕輪)

上伊那郡箕輪町を中心にした地域一帯は古くから「箕輪」と呼ばれ、「信州伊奈青表紙之水帳」には「箕輪領」が見え、二六か村一万一千三百余石とされ、俗に「箕輪領一万石」と言われた。その境界は現在箕輪町域を中心に、その周辺部の伊那市福島、下手良、大萱、上戸、中条、与地、羽広や南箕輪村大泉、神子柴、田畑などが含まれた。このように広範囲の地域が「箕輪」と呼ばれるようになったのはどんな理由が潜んでいるであろうか。

そもそも「箕輪」という地名の発生地点はごく狭い地点と考えられる。その後、この在地勢力の力が増大したことにより、支配地域の拡大、もしくは外周部の帰順等により、支配者の本拠地の地名「箕輪」が広がるという地名の拡大となつたものと思われる。「箕輪」の発音に対しての



写真 「箕輪」
(三日町秋宮北の天竜川)

地名文字についてみると、「箕輪」を初めとして「蓑輪」「ミノ輪」「美濃輪」「箕ノ輪」「ミノワ」「ミノフ」等の用例があるが、これらは発音「みのわ」への当て字である。

次に「みのわ」の立地上の特徴的な点は、この地名の発源地点と考えられるのは川沿いであるということである。

すなわち、「みのわ」は川の流れと関連があると思われるのである。

「みのわ」の発音を検討すると、「み」はこの用例がたい

へん多いが、前述のように、川もしくは水のことである。次は「みのわ」の「わ」は「曲・輪」で曲がっていること、丸くなっていること、つまり曲流しているところをいう地名である。そうすると、「みのわ」という地名の由来は、川の流れが曲がり、蛇行している所をいう地名となる。

「箕輪」には六世紀ごろから中世にまで及ぶ期間、同一の系譜かどうかは別にして、有力な在地の政治勢力があったとみられる。

(五) おびなしがわ(帯無川)

上伊那郡箕輪町の松島と木下の境を帯無川が東流し、天竜川に入っている。この「帯無川」という呼び名は当地方では珍しいものであり、上伊那郡西地域の天竜川に入る支流河川の典形と思われるので、採り上げることにする。

上伊那の天竜川西岸地域では、天竜川と木曾山脈の間には緩やかに東に向かって傾斜するかなり広い扇状地が広がっている。この地域はかつては平地林や原野等が多かったが、大正八年(一九一九)以降の西天竜水路の開削、水田化事業によって水田に開墾され、その後も開発が進み、農地、住宅地、工場用地等が整備され、往時とはその様相

を急速に変えている。

ところで、この地域には木曾山脈から数多くの中小河川が流れ出ていて、扇状地を浸食しながら、川幅は狭いにもかかわらず、極めて深い渓谷状地形を刻みながら天竜川に入っている。たとえ

ば深沢川（箕輪町）、北の沢川（辰野町）などはその代表例で、谷の深さは一五メートル〜二〇メートルにも及んでいるように見える。これらの河川の長さは、長くても八キロメートルぐらいで支流はないことが多く、流れは屈曲が少ない。

帯無川も木曾山脈から流れ出し、上古田集落の南側を通り、一の宮中原とほぼ一直線状に東に向かって流れ、木下の北



帯無川流路図（箕輪町）

側を経て、国道、飯田線を横切り、坂井で天竜川に注いでいる。国道を横断する部分や坂井付近の帯無川の両岸は、現在コンクリートで固められていて、災害の心配はなさそうである。しかし昭和初期ころまでは帯無川による浸水もあり、人々は常に水防用具を用意し、水に対する備えに努めたという。

ところで、帯無川の由来をどのように見たらよいか苦慮するところであるが、現段階では、見立地名が妥当だろうと考えている。すなわち、帯のように細長くめぐり流れている状況をいう「おぶ」に由来すると考えられる。「おびなし」の「なし」は「成す」で、帯状を「なして」流れている川とみられる。現地の状況はまさしく、一本の流れが扇状地の中を細長く流れていて、帯に見立てるのもわかるような気がする。断定はできないが、現段階ではこのようにしておきたい。

(六) しゃくだて（柵立）

伊那市野底地籍の天竜河畔の「柵立」を中心とする上流域の地は、遠い昔から氾濫洪水の被害を繰り返し受けつづけてきた所である。この間の事情を物語る地名として、上流から「伊賀島」「柵立」「割地」等の分布を通しても理

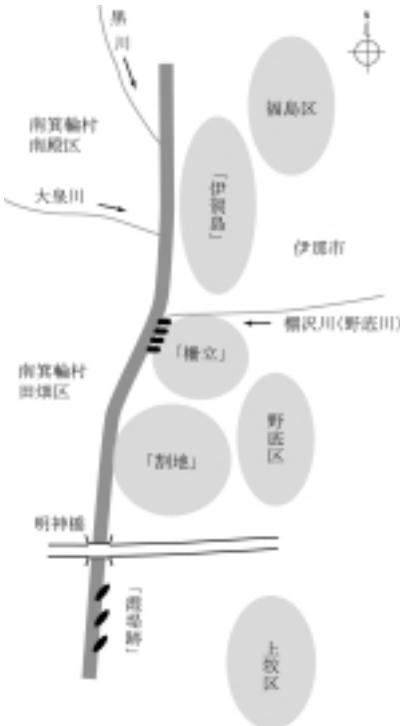
解できる。まず拠点の「柵立」からみることにする。

「柵立」の
天竜川東岸を南北に縦貫するふるさと農道
(平成一〇年竣工)が東側の伊那山地から流
由来
出する柵沢川(野底川)を北から渡るとすぐ
西側に小公園があり、人々はここを「柵立」と呼んでい
る。ここは柵沢川が天竜川へ流入する所でもあり、周辺一
帯よりも若干高くなっている。ふるさと農道建設の際に、
さらに盛り土がなされたためであるが、施工以前から周辺
よりも小高くなっていた所である。現在この地に立つて眺
めると、東の山並みと、その間を流れる天竜川、さらにそ
の西側の段丘に加え、段丘につづく広々とした
一面の水田地帯を一望にすることができる。こ
の眺めは私たちが誇り得る典型的な伊那の自然
景観と言ってもよい。

この「じゃくだて」(柵立)に対しては、「尺
立」等の文字も使われているが、この地名由来
については、文字通り天竜川の水を防ぐため
に、地域の先人たちは「柵」を築造して水から
耕地や家屋等を守ったことに由来すると考えら
れる。

「柵立」の状況について略図によりもう少し述べる。

「柵立」上流三〇メートルには木曾山脈を源流とする
大泉川が天竜川に流入しているほか、さらにその上流二〇
メートルでも、黒川が天竜川に入っている。これらの下
流には、東側の伊那山地からの柵沢川(野底川)も天竜川
に入っている。つまり柵立付近では東西からの支流が合流
していて、川の流れを複雑にしている。特に見落とせない
点は大泉川、黒川の流入によって、天竜川の本流が東側へ
押され、天竜川の東岸(「伊賀島」)は大きく湾曲・曲流し
ていることである。そのために、洪水・満水時には天竜川
の奔流が「柵立」「伊賀島」にまともに突き当たることに



「伊賀島」「柵立」「割地」付近概念図



写真 安政三年「柵立絵図」(図の上が北)
(伊那市野底、平沢右一郎氏蔵)

なるのである。

ところが、「柵立」下流を見渡すと、広々とした野底・上牧の水田地帯が広がり、その先には古町(現中央区)の集落が控えている。もし、「柵立」が欠壊でもすれば、これらの水田地帯や住居地帯に被害が及ぶことになる。

「柵立」は水防上重要な位置にあったので、人々がこの周辺に住みつき、耕作するようになった時から一貫して柵

立の水防には意を注ぎ、様々な努力が続けられてきたと思われる。

「柵立」 藩政時代後期になると資料も出てきて、

高遠藩が「柵立」の水防施設整備に力を入れていた状況が多少わかってくるので、その概要を述べる。

「柵立」の押し出し堤防は、高遠藩郡代阪本天山によって築造されたと言われるが、もしこれが事実なら、彼の在任期間を参考にして考えると、天明期(寛政期(一七八九～一八〇一)ころとなる。

安政三年(一八五六)の『柵立絵図』(伊那市野底平沢右沢一郎氏蔵)によると、「柵立」には五本の水制(地元では「押し出し堤防」という)が、その西側には牛棹らしいものが五基、北側に木工沈床と牛棹とみられるものが三基ずつ、描かれている。この絵図に描かれている柵立の施設は石積みではなく、土積みが主体であったといわれている。

『野底区有文書』による文化五年(一八〇八)と嘉永五年(一八五二)の工事の概要は次のようである。

。文化五年の工事

川除（堤防）の長さ 四四間、幅九尺、材木代金四〇兩、杣大工代四兩一分九匁五分

人足一七〇二四人。この他に野底・上牧組合村は六三〇人の人足。人足は一五歳より六〇歳までの男子総人足数一七〇二四人。

○嘉永五年の工事

堅固な木工沈床工事（外側 木杵、中 大石）を施工。水流の激しい処へ沈める

石運搬の人足四六五〇人

○明治以降の工事

明治五年、一二年、二九年、三一年、三八年、四〇年と頻繁に水防工事が行われ、数万人の労力と資材が投入された。

(七) いがしま（伊賀島）

伊賀島は柵沢川を介して「柵立」と相対している。すでに述べたように、ここの対岸上流には大泉川や黒川が流入しているため、その水勢に押され、天竜川の流れは東側の「伊賀島」側へ土砂の流入を繰り返してきたとみられる。

「伊賀島」の堤防は、現在は堅固にできてはいるが、昭和初期ごろの堤防は、大水の時など堤防の上面すれすれにまで

水がくることもあった。時期を遡れば、堤防はさらに貧弱であったとみられるので、度々土砂によって埋められたとみてよいであろう。

このように伊賀島は、いつしか土砂に埋まる所という固定観念すら生まれたものとみられ、この地名が生まれたと考えられる。

「伊賀島」の由来については、私たちが使う言葉、野菜を「埋ける」、山崩れで人家が「埋かる」があるが、この「埋かる」「埋ける」が語源と考えてよいと思われる。現地状況も先に述べたとおり土砂に埋かった所であり、矛盾はない。

「島」は水に囲まれた陸地も島であるが、この「島」は川沿いの稲作地、集落そのものを指す場合もある。この場合は、に該当すると思われる。

「いが」（伊賀）という埋かった所をいう地名は決して珍しいものではなく、下伊那には「伊賀良」がある。ここは川によって埋かった所ではなく、山崩れにより大量の土砂が長期にわたって流れ下り、埋められた所である。このほか下伊那郡豊丘村「筏」もまた「いが」地名とみられ、石積の水制が現存している。ここも古来水害常襲地で近年まで一ノ刈・二ノ刈・三ノ刈の三基の石積の水制が残って

いたが、二基は近代的なものに生まれ変わっている。

(八) かすみてい(霞堤)

伊那市南割、中臈、下臈、上川手、下川手、境等の三峰川右岸堤防の北側と集落との間に、直径約四〇センチメートルの丸石だけを積み上げた堅固な堤防が七基確認でき



写真 三峰川北岸の「霞堤」(伊那市美篤)

る。人々はこれを「霞堤」「霞づつみ」と呼んでいる。これら一連の石積みめの堤防は現在伊那市の「まほら伊那いいとこ百選」の中に「霞堤」として選ばれている。

山梨県釜無川流域にも「霞堤」と呼ばれるものがある。これらは甲斐の甲州流水防術によるものといわれ、その歴史は長く、「荒れ川」釜無川流域では瀬替えを目的に、早いものは一六世紀半ばには造られていたようである。しかし山梨県では「霞堤」という言葉は近世以前には見えず、明治以降言われるようになったとみられている。

伊那市の場合、聞き取りや資料探訪に努めたが、現在までに築造時期等が直接わかる資料を明らかにできなかった。しかし次のような間接的ながらも石堤に関するものがある。村誌『みすず』に明治二六年(一八九三)一月、旧美篤村葦沢・笠原南割・下大島耕地から長野県知事に出された「堤防築設請願」に、明治一八年以来、上大島・上川手・下川手・青島の沿岸には堅牢不拔なる県税支弁の石堤築設相成り、とある。これによって、現在みられる「霞堤」はこの時期から逐次築造したことが考えられる。

「霞堤」は今日の水防工学の上では「水制」の一つに位置づけられる。一般論としては霞堤による調節効果に疑問がもたれているという。技術の進歩や進んだ機械力を駆使

して、堅固な水防施設ができるようになったこと、また土地利用も水田から宅地等への転換が進み、現在では霞堤の様なものも築造されなくなった。

山梨県の「霞堤」については、一つの堤防（主堤防）と他の堤防（控え堤防）が重ね合わせになっている堤防だとし、その機能・特性は次のようである（山梨県教委・若草町教委・田中大輔「かすみ堤にみる近世築堤法」）。

氾濫洪水を本来の河道に戻す。堤内の余水の排除。開口部から逆流させ遊水させる。外への通路に利用。

舟の係留・避難によい。砂礫の堆積を抑え、沃土を沈殿させる。この山梨県の考え方を念頭に、伊那市三峰川の「霞堤」をみると、釜無川沿いのものと同じ機能を狙って築造されたものと考えられる。現在は上流にダムもあり、堤防も堅固なので、この石積み堤防にまで三峰川の水は来ていないが、昭和三六年の三六災害の時には、三峰川の堤防が下川手のすぐ南で約一〇〇メートル決壊し、この石積み堤防の辺りまで濁流が押し寄せた。しかし石積み堤防によって水は阻止され、再び三峰川へ戻ったという。これを見た人々はこの堤防を造った昔の人の見識に感服するのみだったと話す人が多い。

ところでこの「霞堤」は素人目には普通の堤防とは、か

なり異なっているように見える。第一に、これらの霞堤は数百メートル以上もの間隔をおいて、処々に築造されている。第二には堤防の向きは集落側から川下に向かってほぼ斜めに、処によっては湾曲し延びている。個々の霞堤の長ささは約一三〇メートル、一〇〇メートルとまちまちである。比較的規模の大きい下阜の霞堤は石積みの基部の幅は約一四メートル、堤防上面の幅四メートル、延長は一三〇メートル、堤防の高さは約三メートルである。

そして川の流れに平行して築造される普通一般の堤防と違って連続することなく、点々と堤防と堤防の間が離れ、分散している。このような「霞堤」では洪水氾濫の際には、水が浸入することも考えられる。しかし霞堤による水防思想は、堤防内に水を入れられないというものではなく、洪水氾濫による水の猛威を軟らげ、流れる勢いを殺いで、下流部の被害を少なくしようとする機能と背後地の排水をよくする機能に着目したものと考えられている。このような目的の霞堤であったので、各所で水を溢れさせ、時には堤防を乗り越えさせ、徐々に水勢を弱めると同時に入ってきた水を排除する策がとられたと考えられる。それにしても、霞堤で注目すべき点は当時の人々の水防に対する考え方である。人々は自然の偉大さ、猛威を率直に受け入れ、これと

まともに対峙することなく、自然に逆らつては生きられないという基本理念、自然への畏敬・謙虚さが、まずあつたと考えられる。だから霞堤を越えて入ってくる水も受容しながら、徐々に水勢を弱め、下流域への被害を食い止めようとす姿勢のなかに、先人の生き方、物の考え方を窺うことができるように思われる。

ところで、霞堤の「かすみ」についての定説はないといふが、「か」は通常「川」の略であることが多い。「すみ」は、隅、奥、端を言うので、川の本流に対するものではなく、川の隅、端に設けられた堤防とみてよいであろう。このほか、堤防の一部が霞のように消えてなくなるからという見方もあるという。

(九) どてはっちょう(土手八丁)・おおどて(大土手)

旧伊那中央病院近くの天竜川西岸堤防には桜並木がある。この桜は春の花の時期は言うまでもなく、春から秋の間は緑陰が形づくられ、これが天竜の流れともよく映えて、好ましい環境になっている。この桜の木はかなりの古木で、相当の年数を経ているように見える。地元の話や資料によると、この桜は大正十二年(一九二二)に植えられ

たというから、八〇年の年月を経ているわけである。この桜並木は南の伊那大橋から北は上牧に通じる水神橋までの間に植えられ、延々と連なっていたという。しかし桜の成長に伴って、これに沿う水田の稲作の障害となつたり、堤防の強度にも影響するというので伐採され、今は旧中央病院付近に残るだけになってしまった。

ところで大正十二年にこの堤防に桜が植えられた理由について『伊那市史』によれば以下のとおりである。

二条橋下流五〇メートルの現国道西側に伊那電気館という映画館が開設されたのを機に、それまで一面見渡す限りの水田地帯の中に忽然と新興歓楽街が出現することとなつた。これに対し、地元では山寺商工団を結成し、その記念事業として上述の区間に桜の植樹を行ったという。そして伊那大橋から二条橋の間の飲食店等が多い区間は「土手八丁」通称「ドテ八丁」と呼ばれて賑わい、今も当時の余韻を残していて、飲食店街が形づくられている。

一方、「土手八丁」対岸の中央区側の堤防は「大土手」と呼ばれ、堅固な両岸の堤防は水害から地域を守っている。

ところがこれら「土手八丁」と「大土手」の両堤防は、一朝一夕に成つたものではなく、『伊那市山寺区共有文書』



図 「土手八丁」・「大土手」付近概念図

そもそも天竜川の流路は一定不変のものがなく、長い間には大洪水などを機に大きく変わるということを繰り返してきた。

天竜川の流路が現在のよう
に定まったのは、基本的には
江戸時代以降であった。それ
までの天竜川は、東西の段丘
の間に広がる氾濫原を自由に
流れていたわけで、川の流れ
は一本とは限らず、時には二
本、三本という具合に、場所
により、時期によって様々な
姿で流れていた。以下、伊那
市「土手八丁」周辺を例に流路
変遷の事情と、それに伴って
地域住民の対応のようすを見る
ことにする。

からわかっているだけでも、すでに文化五年（一八〇八）から川除普請の必要性が訴えられていたのである。

しかし、天竜川東西の村々の間では利害関係が対立し、その築堤は生易しいことではなかった。こうした難しい問題を克服し、どのようにして今日目にする堤防が造られたかをみることにする。

○「天竜川筋模様替願」文化五年（一八〇八）二月（「山寺区共有文書」）

「山寺村の河原田先の天竜川は元禄三年（一六九〇）の

検地以前から御園村の下から対岸の上牧新田を通り、さらに古町村北の「清水荒なぎ」前を通る川筋でした。私どもは山寺の「荻島」(旧中央病院付近)の対岸、上牧の与左衛門新田や古町村の田なども買い受け所有しています。その後時々川が決壊し、山寺村地先から大橋まで川になったこともあり。このごろでは年に三、四回川除普請(堤防工事)をし、大小百姓の困窮は益々募り、たいへん困っています。この辺りの天竜川はその地盤の方が高いため、田は足入深田になり、場所によっては地底から水が湧き出し稲は毎年すくみ、以前よりも田の品位は悪くなるばかりです。こんなわけで、年貢を納める百姓の暮らしの行き詰まりは必至です。

去る卯年(前年の文化四年か)の出水の時は、往古の川筋の「荒なぎ」前(古川沿い)へ切れ込み、水勢は六が対岸(古川側)、四がこちら(山寺側)へ流れましたが、今後の出水の場合、こちら側へ流れ込むことも考えられます。どうか、御園村下の水神碑の処で山寺側へ流れ込む川を切って、昔の川へ水を全部流すようにお願い奉ります(下略)。

資料に見える御園水神碑というのは大清水川が天竜川に

流入する地点で、現在、水神(碑)はすぐ西側の双葉神社に合祀されている。水神碑があった所には杉の原木が二本あったが、昭和三年伐られた。合流点の東は勘左島(草刈地)であった。

伊那市北部地域の天竜川のうち、伊那市上牧、古町附近の流路は元禄三年(一六九〇)以前は御園村下(現大清水流入点南の双葉神社付近。概念図参照)から、現在の天竜川の流路を東に横切って、東岸の古川沿いの清水荒なぎ前を通る流路(現県道竜東線筋)であった。この流路は現地周辺に分布する地名等から、かなり古くからのものらしく見える。たとえば上牧の南には、「滝場」という地名があり、これは「滾場」^{たぎは}を語源とする地名とみられる。そもそも「滾場」は川の水が煮え滾るように渦巻いて流れる処をいう地名である。現地を見ると、「滝場」の対岸(西岸)には大清水川が流入している。そのために天竜川は東へ押され、段丘に突き当たり「滝場」付近で、渦巻き、逆巻いて流れたために、この地名が発生したものと考えてよいであろう。そして段丘に突き当たった天竜川はそのまま、段丘に沿って、現在の古川沿いの竜東線筋を流れたとみられる。

ところが、文化五年(一八〇八)か、その前年の出水の



写真 御園水神碑跡（ガードレールのところ）

によると、昭和初期でも、現八幡町を流れる戸谷川から、中溝川（現在は暗渠になり、上は道路になっている）、さらにその東の天竜川まで、一面湿地状で、中溝川はきれいな水が流れていたという。

なお、現中央区側の資料によると、中溝川へ流れた水は古町村の出村、四日市場（現大橋下流東岸）を押し流して

際、それまで御園水神碑の所から大きく東へ曲流していた天竜川は、そこから真つすぐ南の現在の飯田線や中溝川の筋を流れるように変わった。つまり、以前の流路へ六分、新流路へ四分の二つに分流したのである。現地の人々

「しまった。ここは東の高遠方面と、西の伊那街道を結ぶ交通の要衝であり、大橋の袂に四の日に市が開かれる四日市場があつたとみられる。

このように天竜川の流路が変わることによって新たな問題が生じた。資料によると、山寺村ではかねてから現在の天竜川東側「荻島」、上牧村の「与左衛門新田」「古町」等



写真 四日市場跡（右側）

に土地を所有していた。したがって、御園水神碑付近で天竜川が切れ込み、現中溝川の川筋（飯田線の東側）を流れるようになる。山寺の人々は荻島、古町等の田や畑を耕作するのに川を渡らなくてはならなくなる。そのため年に

三、四回堤防工事をしているとして、百姓の負担が増え困っていること。さらに天竜川の川筋の地盤が高く、地底から水が湧き出し沼田になり、稲作は年々すくんで（生育しにくい状態）いる等述べた上で、御園水神碑の処から文化五年（四年）の出水以来山寺方面へ流れ込んでいる水を、ここで締め切って往時の川筋へ残らず流し込んで頂きたいとした。このような願いも出されたが、実現せず、その後両村間で紛争が繰り返され長く続いた。結局藩の仲介によって取替証文が交わされた。

その要旨は山寺村荻島の川除場から古町村の荒なぎを見通した線までの八五間と、これにつづく二二二間の堤防は山寺村が造る。さらにこれにつづく区間は古町村が担当することと受結した。

その後古町村から高遠藩に訴状が出され、ようやく明治元年になって、いわゆる「堀川裁許」が出された。この工事は木柱に大石を詰めた堅固なもので、それまでの流路を修正し、山寺村と古町村の真中に堀川を通すというものであった。これに対して、古町村はお受けしたが、山寺村は反対したので、「お上を恐れず不敬不埒至極」として、手鎖入牢者六人、村押込四人のほか名主は名主職取り上げとなった。この工事は水神橋から大橋にまで及ぶ大工事で潰

地として御園村四反二畝、山寺村三町六反二畝、御舞瀨村（現坂下区）四反五畝、上牧村一町四反六畝にのぼった。

資料に見るこの地区の天竜川川筋の変遷をまとめ、若干の考察を加える。

流路の変遷

元禄三年（一六九〇）以前

北からの天竜川の流れは御園水神碑（双葉神社の処）から東へ向かって曲流し、現流路を横切って左岸の現上牧「滝場」の台地へ突き当たり、それより東側の段丘崖に沿って南流し、現中央区土地改良記念碑付近で天竜川に入っていた。その先については入舟から通り町、春日町へ現国道の筋を流れていたとする見方もある。しかし入舟には中溝川、小沢川が、さらに東からの古（小）三峰川の流入もあり、多くの河川が交錯する複雑な流れになっていたとみられる。

○文化五年（一八〇八）ころ

この年の出水によって御園水神碑のところまで東へ曲流していた天竜川は、ここで切れ込み、大橋の辺りまで川になったというから、現中溝川の川筋を流れたとみられる。この時のようすは六分が川東の古川筋へ、四分が中溝川へ流れた。文化五年の出水は古町村の出村、四日市場を押し

流しているので、入舟へ入った中溝川は小沢川の流入も手
伝って、大きく東側に突っ込んだと思われる。

(二〇) いりふね(入舟)

伊那市から高遠方面に通じる国道一五二号線(金沢街
道、杖突街道、高遠街道、藤沢街道)に架る大橋の西岸に
地名「入舟」がある。この地名の由来については、天竜
川通船の舟の出入に因ることも考えられるほか、入舟の
対岸との渡し舟によつて生まれた可能性が全くないわけ
ではない。いずれにしても、川舟運航によつて生まれた地名
と考えられる。明治初期の長野県の地名資料には「入舟」
は見えないので、それ以降に発生したものである。

「入舟」周辺をみると、天竜川西岸では小沢川、中溝川、
戸谷川がここで流入し、東岸からは古川が合流している。
特に中溝川の流入部は凹地で、本流から入り込んでいて、
舟の係留には適している。

一方、入舟の西方約三〇〇メートルには段丘の縁に沿つ
て旧伊那街道が南北に通じている。そして、この街道の
「坂下の辻」から東へ金沢街道、西へは羽広道(権兵衛峠
方面)が分岐している。こうみてくると、「入舟」は水陸
交通の要衝の位置を古くから占めてきたことがわかる。

天竜川通船
実現の背景

現在の私たちは、天竜川を舟によつて上
下し、人や物資を運ぶことなどは思いもよ
らないことである。特に下りはよいとして



写真 「入舟」橋のたもとの舟着場跡(推定)

も、溯上が問題
である。水量が
多く、水勢の激
しい中を、特に
下伊那の巨岩、
絶壁状の所を通
航するがごとき
ことは容易では
ない。

古代史の資料
を見ていてよく
考えたことであ
るが、七・八世
紀ごろ信濃国

(科野国)から都へ送られる貢納品、租税として納めるも
のは、ほとんどが麻布であり、そのほか薬草のようなもの
や鮭の加工品など、どちらかという軽量なものばかりで
ある。山坂が多く、距離の長い信濃国からの物資はまず軽

いものでなくてはならないという、制約があったと思われる。

天竜川通船

の始まり

物資の輸送に苦しむ伊那の人々の中から、天竜の流れを利用し、舟による輸送を考える人も出てきたこともわかるが、その前に当時、伊那地方の輸送の主役を担っていた「中馬」に触れておく必要がある。中馬とは、自分の馬（手前の馬「手馬」が訛って「ちゅうま」となったとみられる）による運送業者のことである。

中馬は百姓が農閑期に農間稼ぎとして始まったと言われ、中世末（一六世紀中葉）以降盛んになった。江戸時代から明治三〇年代までの当地方の流通手段は中馬に負うところが極めて大きかった。この中馬は長い伝統と各村々を糾合した組織力を誇り、後発の通船がこの事業への参入はなかなか難しい問題であった。通船側と中馬側との交渉は紛糾が続き、加えてこの地域の村々ばかりでなく隣接地域（諏訪・木曾）からも異議が出た。しかし幕藩側の斡旋もあり、ようやく妥結にこぎつけた。しかしその内容は後述のような通船の経営基盤を揺るがすものであった。

江戸時代の

天竜川通船

別記略年表のように江戸時代初頭、下伊那地方は遠州方面との舟運は開かれていたようであるが、上伊那地方でも寛永年間

（一六二四～一六四四）には春近郷、遠州掛塚間通船があり、その後も行われた。

文政六年（一八二三）になると、神子柴村孫市が、松本御役所へ天竜川通船開業を願い出た。その要旨は概ね次のようである。

○一通船百艘（願い出の時の通船数）

信濃国には通船がなく、物資は牛馬の背（中馬）によって送られてくるので、運賃、諸経費がかさみ、通船が運航している諸国と較べると、高くなり、人々は困苦している。そこで天竜川を利用して諸料を運送すれば、莫大な利益である、と言っている。

孫市の願い出に対し、反対する村々もあり、その理由の主なものは次のようであった。

- ・通船運搬は中馬稼ぎに影響する。
- ・米が移出され、米価が上がる。
- ・諏訪地方は通船によって、天竜川の水はけが悪くなる。

明治期の
通船

明治四年、上、下伊那には渡し舟以外に船が五〇艘（六〇艘）あつたといわれる。中でも上伊那南部から下伊那地方に多く、一〇石積の舟もあつたという。高遠県では、明治四年に坂下に船会所を建て、これが以後の天竜川通船の拠点になつたといふ（『坂下区誌』）。

明治四年には松島（箕輪町）から遠州掛塚（五〇余里）間に通船が運航されていたようであるが、明治七年経営不振から解散している。

しかし、その後も通船は上伊那南部から下伊那地方では行われていたようである。

天竜川通船組合

明治二七年になると、南箕輪村の加藤亮敬は天竜川沿いの回漕業者を組織して、天竜川通船組合が誕生した（『坂下区誌』）。この通船は坂下から別府（飯田）までで、運賃は四〇銭、一日平均乗客数は七名であつた。この組合も明治三六年解散している。

天竜川上流通船営業組合

明治三五年伊那市福島の松崎竜之介、坂下の中村奥治

郎、南向村の塩沢貞雄が天竜川上流通船営業組合を設立した。

組合員の構成は大半が下伊那の竜東側、上伊那では伊那町の一人を除いて全員が南向みなた（現中川村の竜東側）になつており、この通船組合の営業対象地域はこれらの地域であつたとみられる。これらの地域は道路状況が悪く中馬輪送が行われ難く、その補完的機能を通船に求めていたのである。

運航区間は、以下のとおりであつた。

辰野平出から伊那大橋間の下りのみ。

伊那大橋 市田 別府 時又まで。

この組合は運営を開始して間もなく、意見対立から挫折解散するに至つた。

その後、明治三六年中村奥治郎は単独で営業を始めた。しかし、明治二〇年代以降始められた道路改修が進み、運送馬車が急速に普及し、川には橋が架けられ、どんな地域にも運送馬車が入り込むようになった。運送馬車の補完としての通船は最早その使命は終わらざるを得なかつた。

このほか、時は遡るが、明治一五年（一八八二）、古町村（現伊那市中央区）の新右衛門が古川に面する場所（合流点の東）に通船問屋を開いた。この通船は冬期には天竜

川の水が少なくなるため休業したが、米などを積んで、古町村から飯田の時又間を運航した。この間の所要時間は下り一四時間、上りは二日か三日を要した。舟の引き上げの際は岩に上ったり、川に入ったりで苦勞が多かった。運航日は毎日、もしくは「二三日」ことで、不定期運航であった。開始後しばらくは順調で、舟の名は天竜丸といい、船頭は四人ぐらい、三〇歳台の屈強な人たちであったという。しかしこの通船は上述の中村奥治郎、古町の城倉代三郎等による通船が行われるに及んで、廃業となった（中央区誌）。

天竜川通船の歴史は、江戸時代以来、挑戦、開業、休業、廃業の繰り返しであった。そこには種々の理由があったとみられるが、中でも大きな要因は、中馬等の既存体制と競合対立することが多く、経営基盤の整備が難しく、安定経営ができなかったことによると思われる。

それにしても、江戸時代以来、天竜川に舟を通そうとする人々の熱意には敬服のほかはない。

(二二) たぎり (田切)

「田切」は上伊那地方の天竜川流域に集中する特徴的な地名である。そして「田切」という地名のほとんどが、

天竜川に流入する支流の川の名であったり、それらに沿う地名である。さらにこれらの立地点はすべてが、天竜川西側だけに偏在していることも大いに興味がそえられる点である。

様々な書物等にただ単に「田切地形」という言い方をさされているのによく出会う。これは、木曾山脈から流れ出る天竜川の支流が、西側段丘扇状地上の水田地帯のなかを流れる際に形づくった河谷によって分断された地形を言っているようである。もし上述のようなら、地名文字「田切」をそのまま読んだことになる。しかし地名「田切」は「田切地形」とは直接関連するものではなく、由来語源は全く別個のものである。

まず「田切」地名の分布状況と地形等の自然環境からみることにする（概念図参照）。

伊那市街地の南で木曾山脈からの犬田切川が天竜川に入っている。これを皮切りに南へ小田切川、太田切川、古田切川、中田切川、与田切川など、これらすべてが天竜川西側からの流入河川である。これらのほか飯島町には中田切川に沿い「田切」集落があり、これも天竜川西側に立地している。「田切」が、なぜ天竜川西側だけに分布しているかという問題も極めて興味深いことである。



図 「田切」 分布図

そこで天竜川の東西ではどんな差異があるかを見ると、東側には赤石山脈とその前山にあたる伊那山地が南北に走っている。これに対し、西側にも木曾山脈がこれまた天竜川と平行して南北に連なっている。こうした点では両者の間には大きな違いは認められないが、ただ一点顕著な違いは西側の山並み（木曾山脈）は標高が高く険しいのに加え、間近に迫っていることである。これに対し、東側の伊那山地はそれほど接近していない上に標高はそれほど高くないことである。

このような西側の地形は山からの川の流れを急流にする。そして、「田切」地名は西側だけに分布し、しかも

「田切」は川の名になっているものがほとんどであることから、「田切」は川の流れに関係ありそうな地名の可能性が高い。

そこで「田切」のつく川を見ると、いずれの川も花崗岩の径約四〜五〇センチメートル以上、一・二メートルにも及ぶ石が累々と連なり、その石の間を水が流れているという状況である。私の経験であるが、太田切川畔に立つて話をしても、普段の大きさの声では川の瀬音に阻まれて聞きとれないのである。つまりいつも「ざあーざあー」と音高く流れている。

もう一例、豪雨直後の太田切川に架かる橋の上に立った時のことである。濁流が川幅いっぱい逆巻き、渦巻いて流れ、まさに驚天動地という言葉そのままであった。水中では大きな石が水に流され、石同士が衝突し、大きな音をたてて流れ、恐ろしい程で、この情景は印象深く忘れ難いものがある。

さて、「田切」地名の由来を言葉の側から考えなくてはならないが、これは川の流れが激しいという状況から発生した可能性が高いので、この観点からみると水が勢いよく流れるありさまを言う言葉として、「たぎる」という動詞があり、この連用形は「たぎり」である。これに当てる文

字としては「滾る」「や」「激る」「沸る」等が使われる。「たぎる」は湯が煮えたぎるさまや、川の水が勢いよく流れ、わきあがるさまを表わす言葉である。

以上のようにみていると、「田切」は山に近い急傾斜地形の中を、急流が川の中の石の間を流れる際、渦巻き逆巻き音高らかに流れる情景から生まれた地名と考えられる。

「田切」地名は、長野県内では東信、北信にも分布している。これらも川の流れから生まれたとみられる。北信を流れる犀川がまさに善光寺平に入らんとする地点に「小田切」がある。ここは川幅が最も狭くなっている所で、今は小田切発電所のダムができていて、往時の景観は見られない。しかし地形をみれば、以前は逆巻き、滾って流れていたことは容易に推測できる。

また上伊那最南端中川村に「片桐」、下伊那北端松川町には「上片桐」がある。この地名もその由来は「たぎり」と考えられ「かたぎり」の「か」は意味を強める接頭語である。たとえば「腹一文字にかつ切る」の「か」と同じである。したがって、ある時期、激しく流れる川の流れを「かつたぎる流れ」のように言われたことも考えられる。私は「片桐」の地名発生地点は上片桐だと考えている。

もう一例。NHKテレビの地方紹介番組の中で、鹿児島



写真 太田切川

県桜島火山周辺の海底を水中カメラで撮影し放映していた。それによると、この海底から盛んにガスと熱湯を噴出し、渦巻き、泡立っていた。ところが、鹿児島の現地の人々はこれをやはり「たぎり」と呼ぶと報じていた。納得いくことである。

「田切」は湯が煮えたぎる様に流れたり、川が逆巻いて

流れるところに発生した地名とみてよいであろう。

(一一) みぶがわ(三峰川)・みぶさわ(壬生沢)

三峰川

三峰川は赤石山脈に源を發して北流し、高遠町で山室川、藤沢川を合わせ、西に向きを変えて伊那山地を切つて流れ、伊那市で天竜川に合流している。この延長は約七三キロメートルで、天竜川の支流の中では屈指の大河であり、流域面積も広い。三峰川は古来暴れ川として、名が通つてた。

伊那市新子(によし)の三峰川北岸段丘と同市東春近榛原(はしばら)付近の南岸段丘との間に広がる広大な氾濫原を一見すれば、往昔三峰川がどのように流れていたかを推測することができる。

三峰川上流部は三〇〇メートル級の山々が連なり、山岳地帯の中を深い谷を刻んで流れている。この谷の中には隔絶された集落も点在し、平家落人伝説(浦)、孝行猿の話(柏木)、検校豊平の伝え(非持)をはじめ、木地師に關係するものもあるほか、熱田神社の存在等、民俗学、歴史学の史資料も豊富な地域である。いずれにしても深く狭い三峰川の谷は一本の糸のように山岳地帯の中を奥へ奥へと入っているのである。これを見ると、かつてこの地域は四周との交渉も少なく孤立的な社会の感が強い。



写真 三峰川
発電取水や農業用水により流量は少ない

しかし三峰川の谷の中に入り、辿つてみると、かなり古い時期からの先人の足跡がいたる処に記されている。そしてその足跡は三峰川谷と外周地域との交流往来を示すものも少なくない。ここでは特に地名や民俗の視点から、二、三例を挙げることにする。

三峰川谷

なかお・なこう(中尾)

の民俗

長谷村美和ダム湖の南端に黒河内の集落がある。その黒川の左岸台地上に「中尾」集落があり、ここは中尾歌舞伎で知られる所である。集落に入る坂道を上ると、すぐにまとまった平地がある。ここには中尾歌舞伎の拠点の「長谷村伝統文化等保存伝習施設」の看板を掲げた建物がある。

私がここを訪れた目的は「中尾」の地名由来を調べるためであり、調査の中心になる観点は「中尾」の発音はどうかということであった。幸いに、近くのゲートボール場で、約二〇人の人たちがゲームをしていた。早速、休んでいる人たちに「中尾」の発音をしてもらったり、聞き取りを試してみた。しかし多くの人は「中尾」を「なかお」と発音された。さらに昔の人の発音はどうであったかを中心に尋ねていくと、明治生まれの人は「なこう」と言っていたというのである。これを聞いた時「中尾」の地名由来は解けたように感じた。その後、別の機会に、高齢の人に「中尾」の発音について尋ねてみたが、語尾を強く発音し、今と違っていたということであった。こんな事例から私は「中尾」はかつて「なこう」と発音されていた可能性が高



写真 中尾歌舞伎の拠点

いと考えている。この「なこう」は下伊那地方に分布する「^{なこ}名子」「^{なこ}名古熊」等と同じ語源とみられる平地を言う地名である。この用例は横臥することを「^{なこ}なこーなる」(東海・関西系か)と言うが、この「^{なこ}なこ」に由来すると考えている。そしてこの長谷村の「中尾」も「^{なこ}名子」と同じ平坦な地形の地であることも見逃せないことである。なお大鹿村にも「中尾」がある。これに対し、上伊那地方では今

のところ「中尾」はここ長谷村だけである。

「たいざ」

私が下伊那地方を巡っていた時、下伊那地方には「たいざ」という地名が目だつて多く分布しているということに気づいた。その文字は千差万別で、「泰座」「対座」「鯛座」「大座」など実に多様である。そして現地をみると、多く



写真 中尾の「たいざ」

が村の中心的な位置にあり、ほぼ平地状の地形だということである。しかしこの由来は見当すらつかないまま、注意をしているほかなかった。そんな中、ある時、「十和田八幡平国立公園」の「八幡平」の「平」は「たい」と発音することに気づいた。そしていずれの「たいざ」もその地形は平地であるので、これは平地をいう地名に違いないという結論に達したのである。そこで上伊那地方の「たい」地名の地を訪れ、その地形が平地かどうかを確かめてみた。

上伊那郡高遠町の「たい」地名とみられる藤沢川に沿つ「小田井」「台」「伊那市手良の「入田井」等いずれも紛れもなく小高い平地であることがわかった。これらの例から「たい」は平地をいう地名と見てよいと思われる。「たいざ」の「ざ」は接尾語で、場所や地点を言つものともみよさそうである。「こうみると」「たいざ」は平らなところをいう地名になり、現地の状況とも合致し、納得いくところである。

ところで下伊那地方に目立つ平地をいう地名「たいざ」は上伊那地方では私の目にふれたものは長谷村中尾に一例あるだけである。「たいざ」の現地は「中尾」の集落では高い位置にあり、かつては畑作地、荒蕪地のような状態であったというが、現在は花作りのハウスや畑作地になって

いる。

今、あえて「たいざ」をここに取り上げたのは、前述の「中尾」(なごう)とともに、上伊那ではこの三峰川沿いの奥地に唯一みられるからである。この事実は注目すべきことのように思われる。

伝統芸能「歌舞伎」

「中尾」には中尾歌舞伎が伝えられ、集落には拠点になる立派な施設も整えられている。天竜川筋のたとえば箕輪町上古田には人形芝居が伝えられているが、中尾では歌舞伎であり、両者の系統は別のものである。ところが「中尾」から南へ分杭峠を越えた大鹿村には大鹿歌舞伎が伝えられている。この大鹿歌舞伎と中尾歌舞伎とは分杭峠を通る秋葉道を通して結ばれていたことが十分に考えられる。

この地名「中尾」と、地名「たいざ」、さらに歌舞伎の例から、古来三峰川谷のうち南の地域は下伊那地方との関わり合いが強かったことを物語るものであろう。

下伊那との

交通路(近世)

秋葉道は、北から南へ高遠町市場 市
野瀬 分杭峠 鹿塩 程野 上町 木
沢 和田 青崩峠 水窪 秋葉神社とつ

ながる。

この道筋は太古の昔から東海地方と内陸地域とを結び自然が造った通路で、中世では宗良親王が、近世では秋葉詣での人々が通った道でもあった。そして人々と共に様々な文化もこの道を通って伝播したことが考えられる。

溝口熱田神社

長谷村溝口には熱田神社が鎮座している。熱田神社は尾張の熱田神宮を勧請したとあり(『長谷村誌』)、日本武尊を祭神としている。私が注目しているのは、なぜ溝口に熱田神社が祀られているかということである。

史実とは別であるが、『古事記』『日本書紀』には倭(やまと)建命(たけのみこと)(日本武尊)の東征譚が書かれている(両書では径路は異なる)。その中で尊は大石峠(おおいしとうげ)酒折(さかあり)(甲府市「坂下」)で、坂の下という地名であろう) 信濃国 信濃坂(神坂峠) 尾張国のコースを通ったと考えられ、具体的に考えてみると釜無川の溪谷から横岳の南を越え、赤河原を経て戸台川に沿って溝口に出たコースが考えられる。この後は伊那山地を越え、日本武尊伝説のある駒ヶ根市小町屋(おまきけ)大御食神社から神坂峠に出たコースを考えるのが妥当であろう。

このような説話が生まれた背景には、『記紀』が編纂された八世紀初頭、この道筋が畿内と東国を結ぶ広域の道として利用されていたことを示唆し、この道筋はその一部であつたと考えられる。

三峰川奥の地域は高山に囲まれ、孤立的・閉鎖的の社会の感が強いけれども、上述のように古代のころから東国や東海地方とを結ぶ道の十字路の位置にあつたことが考えられる。そして中世から近世においても、この地域は南朝勢力の拠点となつたり、民間信仰の秋葉詣での道として利用され、この道を通してそれぞれの文化が行き交つていたのである。こう見ると、三峰川奥地は決して孤立的、閉鎖的ではなかつたと考えられる。

みぶさわ
（壬生沢）
下伊那郡豊丘村南部には、伊那山地を源流とする壬生沢川が西流し天竜川に入つてい

る。
竜東線の小園^{おの}から分かれ、この壬生沢川の北岸に沿う道を約二キロメートル溯ると「壬生沢」の集落に達する。地元によると、壬生沢はかつては僻地だと言われたが、現在では道路が整備され、周辺や都市部とも往来が便利になり、暮らしはかなり変わったといふ。

ここで「壬生沢」をとり上げる理由は、上伊那の三峰川とその発音が同じで、「みぶ」の由来を解くのに役立つと考えたからである。特に三峰川の場合は、流域も広く「みぶ」地名発生の対象地域を絞り込むのが難しいように考えられるのに対し、「壬生沢」は比較的地域が狭く、「みぶ」の特徴を把握し易いと考えたからである。

小園から東へ入り「壬生沢」に向かつて進むと、壬生沢川は右（南）側の深い谷の底を流れるようになる。「壬生沢」の集落の家々は道に沿つて点在する散村型である。私は「みぶ」という発音から、集落の土目（土質）はどうか、水の状況はどうなっているか、の二点を踏査、聞き取りの重点に据えていた。

村の人口付近ではそれ程ではなかつたが、進むにしたがつて、土は粘土質の土が目につくようになった。その色は一樣ではないが、灰白色のものが主であつた。これらの土は古来より丹生^{にやう}と呼ばれる土で、辺り一帯を覆っていることがわかつた。

「みぶ」の
由来
地元の人から聞き取りをすると表層近く
は丹生であるが、その下層は、多少粒子が

大きい砂糖のザラメ状の土で、ここでは

「サバ土」と呼んでいる。この「サバ土」は粒子が粗いので水はけがよく、住宅造成地の埋め土には最適とされている。現在集落内に採掘場が二、三か所あり、盛んに採掘され、毎日ダンプカーで運び出されているという。いずれにしろ、高い地点に上がる程、丹生が多く、随所に見えることは印象深いことであった。

もう一つの着眼点の水については住宅地の近くで二、三か所湧水を見かけたが、とりわけ湧水が多いとか、湿地があるという所は見当たらなかった。

以上から「壬生沢」の特徴は土目が丹生であり、これが地名になったとみてよいように思われる。すなわち壬生沢の「みぶ」は「にゅう」を語源とし、それが「みぶ」に変化し、この発音に対し「壬生」の文字を当て字したものと考えられる。

話は変わるが、上伊那に戻って三峰河畔に立つて川を見て、まず言えることは川の水が白く濁っているということである。三峰川上流は中央構造線東側を流れているが、この地質は石灰岩層や風化しやすい変成岩類（片岩類）を含みこれが粘土化して水に解け白濁するようである。

ところで、「三峰川」の文字は「みぶがわ」と読むのでこれは発音「みぶ」に対する当て字とみられる。「みぶ」

については、前出、下伊那の「壬生沢」で述べたが、その語源は粘土質の土を言う「にゅう」からきているとみられる。この三峰川を「みぶがわ」と呼ぶようになったのはこの川が白濁しているところから丹生川と呼んだとみられる。それが下伊那の壬生沢と同じように「みぶ」に訛り、それに対し「三峰」の文字を当てたと考えられるのである。

伊那市の三峰川南岸には「新山・新山」があり、ここは江戸時代の資料には「丹生山村」とある。昭和五〇年代、ここにゴルフ場が造成された時、その工事のために山肌が露わになったことがある。その時の土質は全山が灰白色の粘土質の丹生であった。まさしく丹生山村であり、三峰川の白濁した水の色と同じであった。

上記のように下伊那の「壬生沢」も上伊那の「三峰川」もその由来は同じ丹生からきていることが考えられるのである。

(一三) こしぶがわ（小渋川）

小渋川は赤石山脈に源を発し、大河原で南からの青木川を合わせ、落合で北からの鹿塩川を入れて西流し、伊那山地を浸食しつつ深い峡谷を造って中川村渡場付近で天竜川

に合流している。この小渋川は天竜川支流の中でも屈指の荒れ川で、土砂の流出量も大量だったという。また一九六一年（昭和三十六年）の大雨水洪水では大河原の大西山が崩壊し、家屋、耕地に大被害を及ぼし、人命も奪い、川をも塞ぎ止めた。

その後、昭和四四年に洪水調節、土砂止め、天竜川東岸地域の灌漑用水確保や発電のための多目的ダムが建設された（堤高一〇五メートル、堤長三九三・三メートル）。これによって、小渋川の流れは往時とはかなり異なったものになっている。

「しび」地名はよく接するが、伊那地方ではそれ程多くはない。「しび」という言葉に当たってみると、まず、「柿が渋い」がある。「天竜下ればしびきに濡れる」、あるいは家屋の外周などに板等を張って雨を防ぐものを「しびぎ避け」という。この「しびぎ」は細かな飛び散る水気のことである。このほか、田や水溜りに浮かぶ鉄錆を「田渋」「地渋」といい、「これらは「そび」とも呼んでおり、両者は同根の言葉であろう。

地名「渋」に当たってみると、温泉の名にもなっているものが多い。たとえば、茅野市蓼科の「渋の湯」について尋ねたところ、この温泉は硫酸によって、白濁している

とのことであった。また山ノ内町の渋温泉については白濁しているもの、黒っぽく濁っているもの、あるいは鉄分によって赤濁しているものもあり、飲むと渋いという。

そうすると地中から出る濁ったもの、白濁・赤濁したものを「しび」ということが考えられる。

ところで「小渋川」はどのようにみたらよいであろうか。小渋ダム築造後の川の流れは変わったが、それ以前は荒れ川であった点で、飛沫を言う「しびぎ」も考えられないことではない。しかし天竜川流域の川の多くが峡谷地帯の中を流れていることを考えると、小渋川が特別特異な川でもなく、「しびぎ」が川の名になることには多少無理がある。

さて、「しび」という語の結論を出さなくてはならないが、前記したの柿渋との「しびぎ」の適用は無理があるとなればとの可能性がある。の田渋や地渋はごく一般に使われる語で、の温泉の白濁あるいは黒濁していることにも関連があるとみられる。しかし現実的に地渋や田渋が直接小渋川に結びつくかとなると、躊躇せざるを得ない。

そうなると、「小渋」は、残るの水（温泉）の濁りを「渋」という言葉で表現したよつに思われてくる。すでに

ふれたが、三峰川もこの小渋川も上流部は同一の地質で、その風化した粘土化した片岩類や石灰岩を含む地質によって水が白濁した流れになっていることを思うと、流域の人々は同じ白濁した流れに対し、「小渋川」と呼ぶようになったことが考えられてくる。なお、「小渋川」の「小」は大小の「小」ではなく、接頭語「お」への当て字と考えられる。

(一四) わだ(和田)・こわだ(小和田)

下伊那郡南信濃村中心部に遠山川の流れに沿って「和田」がある。ここは近世における秋葉詣に利用された秋葉街道に沿う街で、現在でも往時の面影を色濃く残している。

この地域では正徳五年(一七一六)、享保元年(一七七一六)の洪水、同二年の旱魃等があり、また享保三年には大地震(遠山地震)により山の一部が崩壊し、遠山川を塞ぎ止めた。そのため遠山地方の田畑の三分一が被害を受けたという。なおこの崩壊によって残された山が和田小学校北の「出山」だといわれている。しかし、「和田」という地名は地震による崩壊以前からあったものとみてよからう。

この辺りの遠山川は「木沢」付近で上村川を合わせた

後、「小道木」^{こどうぎ} 辺りでは直角状に曲がり、屈曲を重ね複雑な流れをした後、和田集落北側の山地(森山)に突き当たり、ここでも直角状に向きを変えた後、南流している。そして和田の新町 本町 下和田付近は遠山川の流れによって地形が大きく蛇行している。地形学的には穿入蛇行といい、地質構造上の弱線(断層や岩質の異なる境界部など)



写真 「和田」(南信濃村)
写真の中央を遠山川が流れている



「小和田」周辺地形図（中川村）

に沿って浸食が進行した流れである。

一方、上伊那中川村の「小和田」では、北からの天竜川の流れは坂戸を経て同村下平集落が展開する台地に突き当たる。この台地下部には岩石が露出し、川の流れは西に直角状に曲がり、「竹の上」の集落や牧ヶ原の台地の脚部を大きく浸食して弧を描いた後、さらに南に向かって流れている。このように「小和田」は大きく蛇行した地形の中にあり、北から西、さらに南の部分は大きな台地で囲まれて

いる。そのため、「小和田」は北や西の方向からの風を遮り、上伊那で最も気温が高く暖かな地になっている。

以上、南信濃村の「和田」と中川村の「小和田」についてみてきたが、両者に共通している点は共に川沿いの地で、その流れによる浸食を受け、地形が大きく蛇行しているということである。

ところで、「わだ」の立地点をみると、海や湖に面しているもの、川の流れに臨んでいるもの、全くの山中に位置するものなどもある。たとえば、伊那市手良「東松」の「和田」は、東松の集落の最も奥の山寄りに位置し、標高の高い処である。ここは山地と微傾斜地との境の線が弧を描いて山地の部分に曲がりこんでいる。

以上、「わだ」についての共通点をみてきたが、次はその由来を考えることにする。

『万葉集』一七に次のようにある。

「ささなみの滋賀の大和太（おおわだ）淀むとも、昔の人にもまた会わめやも」

この中の「大和太」とは大きな入江のことであり、このほか、『万葉集』『日本書紀』『枕草子』にも見られる。

このように日本では古くから「わた」が使われてきたと言つてよいが、このほか身近な例としては、腸のことを

「はらわた」と言いが、腸は曲がりくねっているという点で共通する。

さらに『大言海』では「わだ」は「回所」（わと）が転じたものといい、「曲がる処」、「曲がって水が淀む処」としている。

以上のように、「わだ」の現地の状況や古い時代の具体例等から考えると、「わだ」は入り込み曲がった地形をいう言葉だと考えられるのである。

なお「小和田」の「小」については、小渋川の項で述べたように、大小の「小」とみるべきではなく、「和田」に対する接頭語の「お」への当て字とみられる。

(二五) かじがしま（鍛冶ヶ島）

天竜川の大洪水によって、全村が濁流に押し流され、その後復興することもなく廃村になったという実に痛ましい事例がある。それは現伊那市西春近にあつた表木村の枝郷である鍛冶ヶ島村のことである。この村名の表記は「梶ヶ島」「梶ヶ島」も使われている。

享保一一年（一七二六）の旧暦五月、豪雨によって、天竜川は大洪水となった。当時高遠藩の春近郷は大きな被害を受けた。鍛冶ヶ島村は当時三〇戸（地元資料では一四



写真 鍛冶ヶ島があつたとされる場所周辺
（「空から見た天竜川」より）

戸）であつたが、全戸、全水田（地元資料では約一〇町歩）流失の憂き目に遭つた。そして、鍛冶ヶ島村は再興することもなく廃村となつてしまつた。まさに悲惨極まりない事例である。被災した村民は親村の表木村へ移住したり、中には伊那街道で茶店をするという苦勞する人もあつ

たという。

この鍛冶ケ島村の位置がどの辺りかを知るため、表木の
下村や下小出等で聞き取り調査をしてみた。その辺りに土
地を持っていた人や研究している人の話を総合すると、次
のようである。

現地は藤沢川が天竜川に流入している地点を中心に、そ
の上下流域だと考えられている（有賀千篤氏）。ここの地
名は「梶ケ島」「上梶ケ島」「下梶ケ島」である。この一帯
は現在、天竜川の河川敷の中にあり、藤沢川流入点の北は
かなりの量の土砂の堆積があり、これを整地し、約五〇
メートルほどの石まじりの砂地の平地になっている。一方流
入点の南は骨材プラント工場の敷地で、その南は大きな堤
防が整備され、また基盤整備事業により整然とした水田地
帯になっていて、とても往時を偲ぶことはできない。

往時の村がどの辺りであつたかを、具体的にいうことは
難しいが、まず考えられることは藤沢川の流入点付近であ
る。この川は大量の土砂を押し出すので、この地点（右記
の約五〇メートルの整地された平地）にはその堆積が進み、
自然堤防状の地形がみられる。しかもここの地名が「梶ケ
島」であることを思うとき、村の位置としては、この周辺
が考えられる。

鍛冶ケ島村流失という災害が起きた享保一一年前後の水
害の状況を見ると、

享保四年（一七一九）大洪水（亥年の洪水）

同五年天竜川氾濫、田畑二三八〇石損毛、川除流出

同六年天竜川満水高遠領内二三五〇石余損毛

同七年大飢饉

同八年と同九年洪水

同一〇年高遠地方大地震

同一年大洪水（鍛冶ケ島村流失）

同二年～同五年毎年満水洪水

同一年六洪水、天竜川の橋すべて流失（亥の川欠）

以後ほとんど毎年のように、満水、山鳴り、谷崩れ等が
つづき、前代未聞とある。（以下略）

このような災害頻発に対して、その復旧は小藩にとって
は過重な負担となつたとみられ、享保五年（一七二〇）に
江戸幕府は国役普請制度を制定し、実施した。これは二〇
万石以下の小藩が、工事量の大きい河川、道路などの修築
をする場合、一〇分の一は幕府が負担し、残余は藩領、寺
社領の商人、百姓が負担するというもので、伊那地方でも
実施された。

「かじ」という地名はそれ程多くはないが、身近に結構



写真 「小鍛冶」(駒ヶ根市)

も天竜川に臨んでいたがために全村流失に遭遇しなくてはならなかった。以下、「かじ」の現地を「一見することにする。

高遠町「鍛冶村」は中心市街地から北約三キロメートルにあり、ここには藤沢川が北から流れている。「鍛冶村」はその川の東側にびったりとそれに寄り添うような形で南北に長く展開している。中には建物の土台が堤防の石積の

見える。たとえば、高遠町「鍛冶村」、駒ヶ根

市「小鍛冶」のほかに伊那市富巣(梶ヶ入り)などにも分布する。そして「かじ」地名の特徴は、多くが川に臨んでいるという点である。ここで述べてい

る「鍛冶ケ烏」

ごく近くで支えられている処もある程である。つまり、この集落は遠い昔から藤沢川の流れに削られ浸食され、かじられ(齧られ)てきた所と言ってもよいと思われる。

駒ヶ根市「小鍛冶」は同市下平の南部で、この集落は小鍛冶台地の上に展開している。そして台地の基部は大きな岩石のため、水流による浸食をつけにくく、川の中へ岬状に突き出ている。この現地に立つと、岬状になるまでにはかなり長い時間を要したことを実感するが、とにかく、遠い昔から、小鍛冶台地は天竜川の流れに洗われ、かじられ(齧られ)続けたことと思われる。

二例の「かじ」の現地を言うことは、いずれも川に臨む地で、川の流れに浸食され、「かじられ」てきた所である。

以上のことから「鍛冶」、「梶」のような地名は、「かじ」を語源由来としていえると考えられる。一方、城下町において同職種の職人(鍛冶屋)の集住から発生したといわれる「鍛冶」地名に出会うことがある。しかし上記のものはその可能性は極めて低いように思われる。

(一六) しとく(四徳)

上伊那地方では、享保二年(一七二六)と元文二年



写真 「四徳」(中川村)
もと鉱泉であった森林体験館

(一七三七)

の大洪水によ

って、特に享

保一年には

全村濁流に消

えるという事

例があり(鍛

冶ヶ島村)、

別項にとり上

げた通りであ

る。

「四徳」は

昭和三六年の

豪雨による洪

水によって、集

落の大半が流

され、壊滅的

な被害を受け

、これによっ

て、全村移住

を余儀なくさ

れた集落であ

る。四徳は小

洪は小洪ダム

験館内に復旧されて利用されており、隣接してオートキャンプ場等もある。

四徳は江戸時代には大草村に属していたが、明治一四年

分村独立して四徳村となった。この後四徳村は他の二村と

合併して、南向村をつくり、さらに南向村は片桐村と合併

し中川村となり現在に及んでいる。

次は「四徳」の由来語源に迫ってみるが、地名の本体は

話し言葉(発音)だという立場から、「しとく」をみると、

「し」と「く」に分けて考える必要がある。「し」と「く」に

ついてはすでに事例 1「してべり」(為栗)でみたように、

「して」と「し」とは同類の語と考えられ、これは川や

水のことである。

次は「しとく」の「く」についてであるがこれは接尾語

で、あえて言えば、処、場所、地点を表わすものと考えら

れ、「いづく」の「く」はその具体的用例である。この

ように考えてくると、「しとく」(四徳)という地名は川や

水があり、あるいは水が流れている所という地名になる。

(一七) かきがいと(柿外土)と「かいと」地名

下伊那の天竜川東岸の豊丘村田村地区には「柿外土」を

はじめとし、「荒開土」「開土」「桜垣外」「蔵々垣外」「溝

はじめとし、「荒開土」「開土」「桜垣外」「蔵々垣外」「溝

はじめとし、「荒開土」「開土」「桜垣外」「蔵々垣外」「溝

はじめとし、「荒開土」「開土」「桜垣外」「蔵々垣外」「溝

はじめとし、「荒開土」「開土」「桜垣外」「蔵々垣外」「溝

「開土」「内垣外」等の「かいと」地名がある。このうち、「柿外土」の文字は、明治初期資料では現在とは異なり「柿垣外」になっている。これは地名の発音に対して、ある時期、それに合わせて適当な当て字をしたところ、この方がわかり易いことから定着したものであろう。

「かいと」の文字の使い方について、豊丘村には他地域には見られない特徴ある用字が見られる。たとえば、「柿外土」のほかに「開土」も使われており、「荒開土」「開土」「溝開土」等はその例である。「かいと」はなかなか複雑な問題を含んでいるので、まずこれについて概観する。

長野県には「かいと」地名が濃密に分布し、その数ほとども教えられない程で無数といってもよい。「かいと」が多い所では集落に数カ所にも及ぶ例もある。ここに挙げた豊丘村田村地区の場合でも、七カ所にもものぼっている程である。

この「かいと」地名は、俗に「けえと」と発音され、それへの用字例は実に千差万別で、とても挙げきれないが、主な用例だけでも次のようである。

垣外 海道 海渡 開戸 開土 貝渡 替戸 海戸 街道 貝戸 開渡 垣内 谷戸 飼戸 開登 貝塔 開都等々である。

このように多様な用字の「かいと」であるが、圧倒的に多いのが、「垣外」で、これは長野県域の全域に及んでいる。長野県で最も濃密に分布するのは上伊那、下伊那、諏訪、木曾地域であるが、その中でも上伊那南部から下伊那地方で特に目立っている。

「かいと」の用字については、地域性が見られ、諏訪での「海道」、下伊那の「開土」は珍しく、岡谷市では「海戸」「海外」「海途」「垣外」が併存する例もある。また南信では「海道」「海途」の用例は少なく、中信では「海道」「海渡」が多い。

用字の点でもう一点は、私がこれまで調べた中で長野県内での、「垣内」^{かいと}の用例は松本市の一例だけである。ところが、この「垣内」は畿内地方には極めて多いと言われ、それは基本的には集落やその内部のまとまり、たとえば常会とか屋敷と同じような意味に使われている。そうであれば、当地方の「かいと」とはその概念を異にしていることになる。

次に「かいと」地名はその数が非常に多く、県内では多くの地名と考えられるが、その反面、その性格もはつきしないところのある地名である。そこで、「かいと」地名の性格を明らかにするため、どのような所に使われているか



写真 豊丘村田村地区の「柿外土」付近
 (「空から見た天竜川」より)

をまず見ることにする。

○規模の大小を表すもの

・「大道」・「小海戸」・「広海道」

○位置を表すもの

・「上海戸」・「下開土」・「北海道」・「さげえと」(境

か)・「丑寅垣外」(方向)

○開拓者(所有者)を表すもの

・「与市海道」・「太郎左衛門垣外」

○樹木名を表すもの

・「柏貝戸」・「榎海戸」・「柿垣外」

目印、境界に植えた木によるとみられる。この中の

「柿」の場合、これは「欠」「搔」で川の決壊をいうものもあるであろう。

○地形、地質を表すもの

・「細海途」・「岡海道」・「殿垣外」

「殿」は高所をいうであろう。

○荒地を表わすもの

・「芝垣外」・「原海戸」・「吉原海道」

○辺鄙な処を表わすもの

・「隠開土」貢租のがれの人里から離れた処を表わすか

○特殊職業者の「かいと」を表わすもの

・「鍛冶垣外」・「漁師海渡」・「祢宜垣外」

○水田や屋敷を表わすもの

・「田贄戸」・「海戸田」

(「かいと」は原則的には畑、したがってこれらは例外で数は少ない。)

○ 神社仏閣名になっているもの

・「御堂垣外」・「堂海戸」・「宮垣外」・「八幡垣外」

このような例は多いが、たとえば、「御堂垣外」の場合、「御堂」(みどう)はその発音から「水戸」を言うことが考えられ、そうなると「水戸」すなわち、川沿いや湿地状の「垣外」も考えられる。「八幡垣外」の場合、「はちまん」の発音なら、八幡様のそばの垣外、「やはた」なら、湿地に臨む「垣外」になろう。神仏がつく「垣外」の多くはその近くの「垣外」をいうものである。決め手は現地状況による。

○ 新旧を表わすもの

・「古海道」「荒井がいと」

この「古」は新旧もあるが、多くは湿地状の「垣外」を言うとみられる。「荒」は新規の「垣外」や傾斜地に開かれた「垣外」等が多いであろう。

○ このほか「かいと」地名がその土地の状況を表すもの

「梅垣外」 土砂で埋まった所

「林垣外」 急斜面の地に開かれた「垣外」

「沼垣外」 沼地

「原垣外」 原野

「窪垣外」 窪地

「桜垣外」 谷あい

「古垣外」 湿地

「宮垣外」 神社近く、もしくは湿地

右を見る限り耕作地には不向きな地が多いことがわかる。このほか、「垣外」地名の地を踏査してみたところでは、そのほとんどが、湿地、日照不足の土地、急傾斜地、窪地等で、耕作地としては悪条件の土地であることがわかった。

長野県の「かいと」をまとめると次のようになる。

「かいと」は屋敷や集落の周辺部に位置することが多い。

「かいと」は山や川に近く、湿地、傾斜地、窪地、日照不足地、石、砂地であったり、または水利が悪く、土地利用が進まず荒地として放置されていた、まさに「垣外」の地であった。このような土地のため年貢も免除されるという例もあった(年貢免)。

「かいと」はこのような劣悪地であったが、江戸時代中期以降の農業技術の進歩と畑作振興という時代の要請を受け、畑作が盛んになった。そのため上述のようなそれまで顧みられなかった劣悪地に開発の手が加えられたとみてよからう。「かいと」の多くが畑であるのはこのためであ

る。「かいと」は基本的には比較的新しい時期、つまり江戸時代以降、開発された畑作地をいうものと考えられる。

「柿外土」はどんな
豊丘村の役場周辺には、村役場

「かいと」か
とその関連施設を始め、農協などが集まり、村の行政、産業経済の

中枢を担う近代的な建造物群が立ち並んでいる。この西側には天竜川が流れ、大規模な堤防が施設されている。しかし地名資料をみると往時は、冒頭に挙げたようなこの「柿外土」「荒開土」以下、多くの耕地にならないような荒蕪地が広がっていたことがわかる。つまり過去長年にわたって天竜川の水の脅威を受け、時には大きな被害を受けてきた地域と見てよからう。

ここでは多くの「かいと」の中から直接天竜川の流れが関わっているとみられるものを「二、三とり挙げることにする。

「柿外土」この「かいと」は「柿」を冠している。当地域は「市田柿」のブランドで、広く知られている干柿の産地である。この立場から言つと、柿の木が植えられた「かいと」とも考えられなくもない。しかし地域のどこにても

ある柿の木が地名になるのも合点がいかない。むしろ、身近な「柿」を当て字として使ったと見るのが妥当であるう。

では「かき」という発音にはどんな意味があるだろうか。「欠く」で、これは決壊した処、「掻く」でこれは川の流れによって浸食された所の意味がある。

次に、ここが天竜河畔という立地を考えると、その洪水氾濫によって流されるということが繰り返されたとみられる。特に、上流の台城付近、ホッキの隘路を出て直角状に曲流した天竜川が西岸の下平付近に突き当たり、そこで匆ね返った先が「柿外土」辺りに当たっているように見える。

このように考えると「柿外土」の「柿」は決壊し、「欠け」た所をいうものとみられたり、さらに「掻くこと」すなわち、浸食地形にも適用できるように思われる。

そのほか豊丘村の「荒開土」の「荒」は文字通り荒れた「かいと」、「蔵々垣外」の「ぞぞ」は流水による音響地名で、「百々めき」「びびめき」「とつとつ」等と同類で、「ど」「びび」「びび」等とも共通する地名と考えられる。さらに「溝開土」の「溝」は川を言つとみられ、いずれも天竜川と無関係ではないであらう。

(一八) ださら(出砂原)

天竜川流域のどの地域でも、その歴史資料を見ると、必ず天竜川とその支流の水害に苦しむ人々と、水の脅威にさらされながら、それに立ち向かった人々の姿が書き綴られている。そして、この地域の水害をみると、天竜川本流の流れだけでなく、本流に流れ込む支流流域の地勢なども深くかわり、極めて複雑な様相を呈している。

「出砂原」もこのような例の中の一つであるうえ、「ださら」という地名は極めて珍しく、二五〇〇〇分の一地形図記載地名では全国唯一である。

「出砂原」(下市田) 周辺の水害としては正徳五年(一七一五)前後だけでも、寛政の西満水(一七八九)、文化の子満水(一八〇四)、文政の子満水(一八二八)等、年と共に増加の一途をたどっているが、ここでは出砂原との関係で、正徳五年の末の満水(一七一五)について、その要旨を述べる。

正徳五年

六月十八日

未明から大雨(膝を並べる人の声が聞こえない程)が降り、未の刻(午後二時)には東岸の河野、田村西岸下平まで水浸して諏訪湖のようになり、古今稀有の大満水。田畑残らず流失



「出砂原」周辺地形図(高森町)

し、大量の石砂に埋まり、短期間では再び田畑にはならない、とある。時節柄、田の草取に出ていて俄かの満水で溺死者もあり、家の流失を防ぐために処置して流死した人もあった。

一方大島川上流の不動滝近くの「かぎかけ」山が崩れ、川を堰き止め一大ダムになった。そしてその一角が欠潰し、大音響と共に幅数十間の濁流となり、流れ下った。濁流が下った吉田川原から大島川が天竜川に注ぐ地点では一時天竜川が堰き止められ、海のようになった。そのため天竜川の水は逆流し、上流から流されてきた酒樽、家屋の土台、衣類が入ったつづら等が、約四キロ上流の竜ノ口辺りまで逆流りしたという。

現在、堂所、川底、天白、上川原、市田橋付近から下市田まで、川尻の日影、出砂原等に折重なつて残る巨岩はすべて正徳五年の山崩れによつて不動滝付近から押し流されてきたものだと言われている（『高森町史』）。

とにかく、この時に夥しい人が難に遭つたと言われ、出砂原の明照寺前の三界万霊塔は、その人々を供養したものとされている（『高森町史』）。

このほか、こまめ沢の上家でも山ぬけがあつたという。

この災害によつて耕地を失つた人々も少なくなき、救け米の支給、恩借米が行われた。

「出砂原」の
由来
江戸時代正徳五年の出水被害の現況を
みてきたが、その後、大島川が荒れた
時にはいつも出砂原は荒廢地になつてし

まった、というし、近年の三六災害の時も、現在の下伊那厚生連病院付近から天竜川までは一面砂原になつてしまつた（林藤人「高森町の史蹟を訪ねて」）。

この江戸時代以来の資料を見ると、出砂原は文字通り砂に埋まつた所をいう地名の感が深く、すでに江戸時代末の資料に下市田村下に「出砂原」があり、このほか天竜川関連の地名として、「流田」「羽根ノ下」「北城」がある。「流

田」は水害で流れた田をいうとみられ、「羽根ノ下」の「羽根」は「刳」で、水制をいい、この施設の下の地名をいうものである。「北城」の別称は「登々免喜とどめき」になつており、これは川の流れ、瀬音をいう音響地名であるうから、川端に位置し、常に川の瀬音高らかに流れていたと考えられる。

さて「ださら」について、「だ」という発音は急流（方言）という事例があるほか、墮ちるといふ意味もある。「さ」の発音の原形は「しゃ」であつたかも知れない。「ら」は「原」の字を当ててはいるが、場所、地点などというとみられ、「あちら」「こちら」の「ら」であろう。現地の状況を念頭に置いて考えると、「ださら」は土砂が流れ下つてきた処をいう地名と考えられる。

（一九） いくま（伊久間）

天竜川東岸の喬木村に、天竜川に面して「伊久間」がある。伊久間の上流には東方の伊那山地から流れ出る小川川が天竜川に注いでいる。伊久間集落内を見ると、天竜川沿いの地域の土地は低く、土目は川砂の混入が目立つており、これは過去において、天竜川や小川川の氾濫によつて、水害を受けたことが一度にとどまらず、繰り返された

ことを物語っている。

地区内の地名には、「砂田」「トドメキ」等、川と関係する地名があるほか、「船渡」「船渡上」「船渡尻」等もあり、過去において人々の暮らしては対岸との往来に船が使われていたことを示す地名もある。

現在、天竜川河畔は大型堤防が連なっていて、この周辺一帯の天竜川堤防は上流部の伊那市付近のものより一廻り規模が大きく、一部には水制のような流れの中への突出した構造物もみられる。これらは三六災害の被害を教訓にしたものである。

地名「伊久間」
「いくま」という地名はどうみるかであるが、私は一見して「いく」と「ま」の由来

に分解するのがよいと考えている。この根拠は「ま」で、これは近い所を「ちかま」（近間）というが、その用例と同じで、場所とか地点をいうと考えられる。「いく」は何かであるが、「いく」は水気がある処である。「生け花」や「いけ」（池）にも通じる。何よりも現地の土地は低く、堤防もなかった遠い昔、小川川の水は自ずと入り、天竜川からの水もあり、常に湿潤の地であったことが推測できる。この辺りの土目は砂混じりで、湿り気が



写真 喬木村伊久間地区
（「空から見た天竜川」より）

あり、地面を掘れば三〇センチメートル下は砂利層だとい

う。
このような「伊久間」の地であったので、先人たちの水に対する戦いは長年にわたって続けられたことは言うまで

もないが、主だったものは次のようである。

寛延二年（一七四九）三九〇間の築堤、延享から宝暦にかけて水害が頻発し、毎年のように川除普請が行われた。文化六年（一八〇九）には国役普請によって川除普請が行われた。江戸末期の嘉永四年（一八五二）小川川に石積み聖牛設置の工事を始めとし、合流点に大聖牛による「一ノ刎」を設置し、同時に「二ノ刎」、「三ノ刎」を構築した。さらに下流二〇〇間に大土堤を築造した（『喬木村誌』）。

現在はこれらよりも大規模な施設に生まれ変わり、その跡をとどめていない。

おわりに

私は本書の取材のため、このたび、あらためて、上下伊那地方を巡ってみた。そしてその地の地形・地質等の自然環境や歴史・民俗等の社会環境に接することができた。特にその地に住む多くの人々から様々な話を聞き、その地域なりの事情や歴史・暮らしの実状等、多くのことを学ぶことができた。時には現地を案内され、詳細な説明を受けることもあった。実にありがたい事で、感謝である。

そして今回の私の踏査はふるさと伊那と天竜川をいろいろな角度から見直す機会になり、これによって従来の私の認識をさらに深め、思いを新たにすることができた。中でも指摘したい点は、国敗れて山河あり、という言葉があるように、山河は永遠ではあるが、その山河に対する人の心と目が徐々に変化しているように感じられたことである。

このような兆しの中で、わが郷土の山河はこの先、このままの姿でいるのか、それとも私たちの願いとは裏腹に、経済効率優先の下で、徐々に変貌せざるを得ないこともなしとはしないと考えられるのである。このような問題の選

択は難しい多くの点を孕んでいるが、それを選択するのは私たち自身以外にはないのである。わが郷土が未永く山高く、水清きところであることを祈ること切である。伊那地方の自然景観の典型、東西の山並みとその間を流れる天竜川、さらにこれに沿う段丘、この間に広がる広い水田地帯、さらに言えば段丘上からのパノラマ景観等々天下に誇り得るものであろう。

この本は郷土の人々の口を通して伝えられてきた貴重な地名を通して、天竜川とそれと関連のあるものを選び、現地を歩いて、その地の人々との対話の中から生まれたもので、その凝縮だと言ってもよいように思われる。多少なりとも、私たちの郷土再発見につながる点があれば幸いであらう。

松崎 岩夫 (まつざき いわお)

古代史研究者・地名語源研究者

1923年、長野県伊那市生まれ、同地に現住。文献、史資料による理論研究と踏査、聞き取りなどの実地調査を最重視し、両者の融合による問題解決を図る手法をとっている。

主な著書

- 『信濃古代史の中の人々』(論文集)
- 『伊那市史』「古代編」
- 『史料・地名・踏査に基づく長野県の東山道』
- 『伊那地方の地名』
- 『長野県の地名その由来』
- 『上伊那の地名その由来』
- 『伊那北小学校の歩み』(共著)

地名を通して見る 天竜川と人々の暮らし

平成15年3月31日 発行

企画	国土交通省中部地方整備局	長野県駒ヶ根市上穂南7-10
発行	天竜川上流工事事務所	〒399-4114 ☎ 0265-81-6415
著者	松 崎 岩 夫	長野県伊那市福島378 〒396-0001
編集	榊環境アセスメントセンター松本研究室	長野県南安曇郡梓川村倭3708-1 〒390-1701 ☎ 0263-76-1590
印刷	双葉印刷(有)	長野県松本市城東2-2-6 〒390-0807 ☎ 0263-32-2263

「語りつく天竜川」の発刊にあたって

南アルプス、中央アルプスの高峰にはさまれて、伊那谷を北から南へ貫流する天竜川。その流域では、あり余るほどの自然の恩恵に浴して、人々は豊かな暮らしを育んでいます。しかし、名にし負う“暴れ天竜”は、ひとたび豪雨が見舞えば、日々の穏やかな表情を一変し、猛々しい牙を剥き、人々の暮らしを脅かしてきました。

天竜川上流工事事務所では、天竜川が“母なる川”として優しい微笑をたたえ続けて欲しいと願う人々の切なる気持ちにこたえるため、半世紀にわたり、地域の人々の多大なご協力のもと、自然の脅威と闘いながら河川改修事業や砂防事業に取り組んできました。しかし、まだまだ危険な箇所は多く残されており、絶えず流域の変貌をみつめ、河川管理施設、砂防施設の整備と維持を図っていかなければなりません。

平成9年には河川法の改正が行われ、これまでの「治水」・「利水」を主な目的として進められてきた河川の整備及び管理は、新たに「河川環境の整備と保全」を目的に加えるよう位置づけられました。また、地域の意見を反映した河川整備の計画策定の手続きも創設され、地域の方々の意見を反映させた河川整備の推進が求められる時代になってきています。この地域の方々の意見を採り入れる際には、この天竜川流域に暮らす人々が長い歴史の中で育んできた風土や自然環境といった、基本的な事項について我々行政も理解を深めることが重要と考えています。

「語りつく天竜川」は、こうした考え方に立ち、天竜川に関する地域の知見や経験を収集し、広く地域共有の知識とすることにより、地域の方々に天竜川に対する認識を深めていただき、よりよい天竜川を築いていくことに役立てたいと思い発刊するものです。昭和61年度に初版を発刊してから早17年を迎え、今回の発刊を合わせて57巻になります。これも偏に天竜川を愛する地域の方々、その気持ちに答えようとお忙しい中ご協力いただいた執筆者の方々の賜物です。

なおご執筆頂いた方々には、自由な立場からお考えを披瀝して頂いていますので、国土交通省の見解とは異なる場合がありますことを付言します。

国土交通省中部地方整備局天竜川上流工事事務所

所長 浦 真

「語りつぐ天竜川」目録

- | | |
|--|--------|
| 1. 伊那谷の気象 | 米山啓一著 |
| 2. 天竜川上流域の立地と災害 | 北澤秋司著 |
| 3. 天竜川に於ける河川計画の歩み | 鈴木徳行著 |
| 4. 総合治水の思想 | 上條宏之著 |
| 5. 総合治水と森林と | 中野秀章著 |
| 6. 伊久間地先に於ける天竜川の変遷 | 松澤武著 |
| 7. 天竜峡で見た天竜川水位の変遷 | 今村真直著 |
| 8. 村境は不思議だ | 平沢清人著 |
| 9. 諏訪湖の富栄養化と生物群集の変遷 | 倉沢秀夫著 |
| 10. 諏訪湖の御神渡り | 米山啓一著 |
| 11. 理兵衛堤防 | 下平元護著 |
| 12. 近世 天竜川の治水 <small>伊那郡松島村</small> | 市川脩三著 |
| 13. 川筋の変遷 <small>天竜川と三峰川の場合</small> | 唐沢和雄著 |
| 14. 伊那谷山岳部の降雨特性 | 宮崎敏孝著 |
| 15. 天竜川の橋 | 日下部新一著 |
| 16. 伊東伝兵衛と伝兵衛五井 | 北原優美編 |
| 17. 天竜川の魚や虫たち | 橋爪寿門著 |
| 18. 天竜川のホタル | 勝野重美著 |
| 19. 天竜川流域の村々 | 松澤武著 |
| 20. 小渋川水系に生きる <small>人と水と土と木と</small> | 中村寿人著 |
| 21. ものがたり 理兵衛堤防 | 森岡忠一著 |
| 22. 量地指南に見る 江戸時代中期の測量術 | 吉澤孝和著 |
| 23. 土木技術と生物工学 <small>生きものを扱う技術</small> | 亀山章著 |
| 24. 戦国時代の天竜川 | 笹本正治著 |
| 25. 天竜川の水運 | 日下部新一著 |
| 26. 惣兵衛川除 | 市村咸人著 |
| 27. 紙芝居 開墾堤防 <small>下伊那郡豊丘村伴野</small> | 竹村浪の人著 |
| 28. 昭和36年伊那谷大水害の気象 | 奥田穰著 |
| 29. 天竜川の淵伝説 <small>『熊谷家伝記』を中心に</small> | 笹本正治著 |
| 30. 天竜川の源流地帯 | 赤羽篤著 |

- | | |
|--|---------------------|
| 31. 東天竜 | 三浦孝美 共著
仁科英明 |
| 32. 天竜河原の開発と石川除 | 塩沢仁治 著 |
| 33. 伊那谷は生きている | 松島信幸 著 |
| 34. 天竜川の災害伝説 | 笹本正治 著 |
| 35. 天竜川の災害年表 | 笹本正治 編 |
| 36. 天竜川水運と樽木 | 村瀬典章 著 |
| 37. 水辺の環境を守る | 桜井善雄 著 |
| 38. 諏訪湖 氾濫の社会史 | 北原優美 著 |
| 39. 河川工作物と魚類の生活 | 中村一雄 著 |
| 40. 天竜川上流域の過疎問題 | 山口通之 著 |
| 41. 資料が語る 天竜川大久保番所 | 松村義也 著 |
| 42. 天竜川上流 河辺の植物と植生 | 関岡裕明 著 |
| 43. 水利開発にみる中世諏訪の信仰と治水 | 藤森 明 著 |
| 44. 横川山巡覧記 「辰野町資料第87号」より | 辰野町教育委員会編
赤羽 篤校訂 |
| 45. 天龍川の鳥たち | 福与佐智子 著 |
| 46. 遠山川流域の民俗とふるさとイメージの創造 | 浮葉正親 著 |
| 47. 田切ものがたり | 赤羽 篤 著 |
| 48. カエルと暮して | 山内祥子 著 |
| 49. 伊那の冬の風物詩 ざざ虫 | 牧田 豊 著 |
| 50. みんなの三峰川を次世代に | 三峰川みらい会議
事務局 編 |
| 51. 三峰川ものがたり | 三峰川みらい会議
北原優美 著 |
| 52. 天竜川水系の水質
「泳げる諏訪湖・水遊びのできる天竜川」を目指して | 沖野外輝夫 著 |
| 53. 天竜川の帰化植物たち | 木下 進 著 |
| 54. 中央構造線読み案内 諏訪から大鹿村地藏峠まで | 河本和朗 著 |
| 55. ふるさととの山 駒ヶ岳ものがたり | 赤羽 篤 著 |
| 56. 近世信州伊那郡大河原村の自然環境と人間 | 松原輝男 著 |
| | (以上既刊) |
| 57. 地名を通して見る 天竜川と人々の暮らし | 松崎岩夫 著 |
| | (発刊中) |

